

鶴丸国永調査・考察
～安達組の蓋然性の高い幻覚を見るために～

2026.1.17改訂版

目次

- 1.目的
 - 1-1.安達組の幻覚が見たい、できれば蓋然性高いやつがいい
 - 1-2.刀剣乱舞における「付喪神」
- 2.鶴丸国永調査
 - 2-1.来歴順まとめ
 - 2-1-1.概観
 - 2-1-2.安達氏～北条氏
 - 2-1-3.織田信長～御牧勘兵衛
 - 2-1-4.空白期間②
 - 2-1-5.伊達家～公室御物
 - 2-2.その他個別的検討
 - 2-2-1.竜胆丸、陵丸について
 - 2-2-2.安達氏所有の話の流布
 - 2-2-3.現存刀
- 4.解釈
- 5.今後の課題
- 6.参考文献
 - 6-1.参考文献
 - 6-2.資料名と記載箇所
 - 6-3.各資料の特徴まとめ

1.目的

1-1.安達組の幻覚が見たい、できれば蓋然性高いやつがいい

刀剣乱舞-ONLINE-のキャラクター、髭切と鶴丸国永。過去に安達氏が所持したことから安達組と呼ばれています。安達組って言ってまとめてるけど、ゲーム内では回想も内番台詞もありません。とはいえる2振の組み合わせが好き。好きって言ってるけど、ゲーム内で言及されていない以上幻覚なのも認めざるを得ない。でも好き。うちの本丸では関係があってもいいじゃない。

そんなわけで、「蓋然性の高い幻覚をみるぞー！」の気概で調べ物をしました。それぞれの刀の来歴を踏まえ、キャラクター解釈、関係性の考察をしています。ゲーム内の台詞、極の台詞も引用しておりますので、気になる方はお気を付けください¹。

現時点のまとめ兼気づいたことメモでもあるので、推論とか邪推、気づき、感想、所感、今後掘り下げてみたいポイントとか入ってます。極力控えたつもりですがお気持ちも入っちゃうかも。つまり論文ではなく読み物。また、今回は鶴丸国永に関する調査のまとめ(現時点でのまとめと解釈、今後変わるかも)です。以上ご承知おきの上お読みください。

1-2.刀剣乱舞における「付喪神」

髭切と鶴丸を掘り下げるにあたって、史実や逸話もですが、そもそも刀剣男士というのは何か、という点も必要になってきます。ゲームのホームページでは、刀剣乱舞のキャラクターは「付喪神」とされています。

審神者なる者とは、眠っている物の想い、心を目覚めさせ、自ら戦う力を与え、振るわせる、技をもつ者。その技によって生み出された付喪神(つくもがみ)刀剣男士(とうけんだんし)と共に歴史を守るため、審神者なる者は過去へ飛ぶ——(公式サイトより²)

刀剣男士=審神者(プレイヤー)が生み出した付喪神なんですね。で、この「付喪神」を辞書でひいてみると、

つくも-がみ【付喪神】〔名〕器物が百年を経過すると精霊が宿り、人に害を加えるという俗信からその精霊のことと言う。*御伽草子・付喪神(室町時代小説集所収)(室町中)「陰陽雜記云、器物百年を経て、化して精霊を得てより、人の心を誑かす、これを付喪神と号すといへり」(略)(日本国語大辞典9巻p.308)

つくも-がみ【付喪神】名 百年を経た器物が変化してなる精霊。人の心をたぶらかすと言われる。「陰陽雜記云、器物百年を経て、化して精霊を得てより、人の心を誑かす。これを付喪神と号すといへり。是によりて世俗、毎年立春にさきだちて人家のふる具足を払いだして、路次にすつる事侍り。これを煤払といふ。これ則、百年に一年たらぬ付喪神の災難にあはじとなり」(伽・付喪神記)(略)(角川古語大辞典第4巻p.425)

百年経った器物が妖怪となったもので、人に害を加えたり誑かしたりするようです。この説明だと一緒に戦ってくれそうですね。

では次に、刀剣乱舞の世界では付喪神はどのような存在なのか考えていきます。図録³の用語集では「刀剣男士」の項目に以下のように書かれています。

精神と技をこめて造られた刀剣が人の形となった付喪神。神である彼らにとって、より神格の低い審神者は、自分たちよりも下の存在。しかし同時に、刀剣の持ち主でもある。刀剣自身にとっても、自分の持ち主であることの方が重要なため、「あるじ」や「ぬし」という名称で呼ぶ。

¹ 台詞、回想、修行の手紙は刀剣乱舞wikiに頼りました。

² <https://www.toukenranbu.jp/about/>(2025.2.25閲覧)

³ でじたろう(2023)『刀剣乱舞絢爛図録四』株式会社ニトロプラス

「神」と明言されていること、「神格」という階級があることがわかります。また捨てられた器物ではなく、持ち主もいることもあります。あと山姥切国広はゲーム内で「靈力」とも言っていますね。

また、器物=実在している刀というわけでもないようで、ゲームリリース当初から逸失刀、非実在刀剣、刀工名での実装などがあります。膝丸は別の2つの現存刀とコラボしていたり、結構幅が広そうです。

では何が刀剣男士を形作るかというと、髭切の修行の手紙を見る限り、「長く残る逸話と名前は僕らをより強くするようだよ」「物語と名前を結び、加護の力も戻ってきている」とあるので、逸話や物語が重要なポイントになりそうです。必ず史実に依るわけではないんですね。刀剣男士も、史実をすべて記憶しているというわけでもなく、焼けると記憶が欠けるということもありますし。

メタ的な解釈も含んでしまいますが、おそらくベースにあるのは付喪神ではなく擬人化でしょう。特にゲームとしての刀剣乱舞の話をするなら艦これ⁴は避けて通れませんし。擬人化に器物が姿かたちを得る付喪神の要素にのっかったような感じかな、と思います。艦娘と違って実在が疑われたり刀工人気の刀もいるので、刀そのものの擬人化とすると矛盾点が生まれてしまう故に一旦「付喪神」という概念を借りてきてワンクッショńおいたのかなと。史実を確定させるのも難しいので、だったら逸話も内包できるかたちにしよう、みたいな。

色々並べましたが、要するに妖怪の「付喪神」と刀剣男士の「付喪神」は違うものである、という認識です。

刀剣乱舞の言う「付喪神」は、刀の想いや心を持ち、審神者によって刀剣男士の形を得たもの。そしてその「想いや心」というのは、必ずしも史実に依らず、逸話レベルのもの(それ同士が相反するものであったとしても)でも取り込み内包することができる、ということでしょう。

で、この逸話というのがなかなかに曲者です。物語がどんどん付与されていく例もありますし、古い文献に出てきたところでそれが流布していたかも考えないといけないし、載っている文献の特徴も踏まえないといけないし。史実を探るだけではなく、通時的に資料を見てその流布・変遷まで対象に入れようとしているわけですね。いやあ、刀剣男士って大変だなあ。

じゃあ蓋然性の高い幻覚を見るにはこれ全部調べた方がいいのでは？　はい、がんばります
.....。

2.鶴丸国永調査

2-1.来歴順まとめ

2-1-1.概観

鶴丸国永の来歴を時系列順で追っていきます。基本的には『日本刀大百科事典⁵』とふくみさんのまとめ⁶がベースになっていますので、そちらもどうぞ。

さて、鶴丸国永の来歴ですが、

安達氏→北条氏→(空白期間①)→織田信長→御牧勘兵衛→(空白期間②)→伊達家→明治天皇(以降御物)

⁴ 所感(リリース後3か月くらいで刀剣乱舞を始め、その1か月後くらいに艦これも始めて2~3年提督審神者をしていた)にはなるんですが、だいぶ似てる。というか艦娘の設定を刀剣男士にしてシステムを簡易化した感じです。これも所感なんですが、SNSでは似てるとかパクリとか言われていた記憶。ネットの拾い物の記事ですが、企画段階からかなり艦これを下地にしていそうな感じ。(https://dailynewsonline.jp/article/912828/ 2025.4.3閲覧)

⁵ 福山醉剣(1993年)『日本刀大百科事典』雄山閣出版

⁶ 「鶴丸国永 墓暴きエピソードだけ集積」https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=5410540

「鶴丸考察+前田家吉光移動年表」https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=6617832

「【再投稿】鶴丸国永 銘尽一覧その他」https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=8400626

「鶴丸国永 & 前田藤四郎 新史料紹介」https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=10856643

でほぼ間違いないかと思います。特に伊達家以降は確実なレベル。空白期間②についても、一説によれば御牧氏が手放してから発見されたのも藤森と、家の所在地等近そうなので、もしかしたらきれいに結びつく可能性はあります。あと持ち主は不明ですが、前田綱紀が見たという資料もありますね。ただここは別のことと言っている資料が存在するのでちょっと怪しめ。安達氏以前の持ち主は村上太郎長盛や清野三郎入道など書いてある資料もあるんですが、先行研究で否定されています。これはもう資料の読み方の話になっちゃうんですが、まあ文脈的にそうだろうなという感じ。以降で個別に詳しくみていきます。

2-1-2. 安達氏～北条氏

さて、実際に資料を見ながら検討していきましょう。まずは安達氏が所有したところ、つまり鶴丸が語られるあたりから。享徳元年(1452年)成立の鍛冶名字考では、刀工の国永について以下のように記載されています⁷。

国永 此作太刀保元ノ乱ノ時村上ノ太郎近国改名(アラタメ)長盛帯之清野三郎□道持之同作ノ太刀城陸奥ノ太郎近延之弘安ノ合戦ニヲク□⁸□リ其後サカミ禪門崇□⁹貞時帯之龍膽ヲサヤニスカシタル故ニリ□タウトナツク又ミサトキトモ云又鶴丸ト号ス此作ノメイハ目ヌキトリノ下ニウツフツウニアカリタリ世ニハ国永二人アリ此作ハ国ノ字ミシカシ今一人ハ国ノ字ナカシ此作ハ近則改名ナリ此作太刀十三振刀廿三腰日本ニアル宝物也

刀剣書の信憑性、と言われると怪しいんですけどね。資料編を見てもらえばわかると思いますが、他の資料では村上太郎長盛と清野三郎入道と、「城太郎」の間に「同作の太刀」とあります。つまり、村上太郎長盛と清野三郎入道が所持した国永の太刀と、「城太郎」や北条貞時が所持した国永の太刀は別という文脈なんですね。というのもあって、今回は前者の2名についてはあまり調べていません。

また、鍛冶名字考では「城陸奥ノ太郎近延」となっていますが、「城太郎」の表記は各資料で揺れています。「城」は安達氏が秋田城介を歴任しており、安達氏の人間だというくらいで、誰かは確定していません。ただどの銘尽にも「城太郎」が所持したと書かれているので、安達氏が所有していたのは(少なくとも当時の認識としては)そうだったんじゃないかなと思います。「城太郎」の表記が揺れるとはいえ、色々な資料に出てくるので、祖本の時点であったのかなあという感じ。歴史書とかは漁れてないんですが、霜月騒動時に鶴丸国永を持っている「城太郎」として、安達貞泰説があるそうです。ちなみに秋田城介、安達氏が歴任するようになったのは景盛からなんですが、なぜか曾我物語真名本ではその前の安達盛長も秋田城介になっているという話も見かけたので¹⁰、もはやそのレベルから疑わなきやいけないのかという感じではあります。誰だろうね、城太郎。

さて、資料に出てくる弘安合戦=霜月騒動です。安達組の邂逅！ やったあ！ が、この霜月騒動、規模が大きい割に資料が少なく、どんな事件だったかは未だに解明されていない部分もあるそう。以下『鎌倉幕府と北条氏¹¹』の内容をまとめます。

霜月騒動は弘安8年11月に起こりました。時期としては元寇を2回経た後です。当時の執権である幼い北条貞時を支えるのは、外祖父で幕府政界の最有力者である安達泰盛と、北条氏嫡流に仕えた御内人(御家人より一段低い身分)の平頼綱でした。両者は対立関係にあります。

⁷ 『天理図書館善本叢書 和書之部第72巻の1』に影印が収録されている。

⁸ ちょっと見えるの「人」っぽい氣もする。ヲク人キリ？

⁹ 「巳十寅」

¹⁰ 山西泰生(2008)「安達氏における史実と物語—真名本『曾我物語』を中心として—」。なお真名本曾我物語成立は鎌倉時代末期から南北朝時代らしいです。

¹¹ 石井進(2004年)『石井進著作集 第4巻 鎌倉幕府と北条氏』岩波書店

事件の直接の原因については、『保暦間記』に、泰盛の子宗景が曾祖父安達景盛は実は頼朝の子であるからと称して源氏に改姓したところ、平頼綱によって安達氏が謀反を企んでいると讒言されたからとしています。

事件の経過も明らかではないようです。泰盛は情勢が不穏なのを見て午時に塔ノ辻(将軍の御所や貞時の館の近く)の安達氏の館に出かけました。ここで頼綱側の攻撃を受け、将軍の御所まで火がかかって焼失するほどの戦いが繰り広げられました。申刻までに勝敗は決し、泰盛側の武士の大半は討たれ、あるいは自害して滅び去ってしまいました。

また、これ以外に泰盛派として連座し、あるいは失脚し、あるいは流罪にされた人物もいます。さらに影響は諸国まで拡大し、各地で泰盛派が討たれ、あるいは自害しました。幼主貞時の命によって有力御家人500人余りがにわかに討伐されたのがこの事件です。

この霜月騒動をもって合議制を特色とする執権政治が終わり、得宗專制政治へと移行していきます。ちなみに数年後に平頼綱は成長した北条貞時に討伐され、生き残った安達氏も政界復帰を果たしています。

なかなか凄惨な事件だったようですね。この後北条貞時が鶴丸国永を探し出したとされていますが、これも個人的には鶴丸国永を目的に探し出したわけじゃないと思っていまして。というのも、安達氏、この霜月騒動前に髭切も所持していたらしいんですよね。で、合戦後に探すとなると、やっぱり源氏の重宝である髭切じゃないかなあと思うわけです。髭切を探していた資料は残っていて、「北条貞時寄進状」があります¹²。

御劍入状公朝状

右大將(源頼朝)家御劍號鬚剪、後御上洛(建久六年)之時、依或貴所御惱、爲御護被進之、其後被籠或靈社之處、陸奥入道眞覺(安達泰盛)令尋取之云々 去年(弘安八年)十一月合戦之後、不慮被尋出之間、於殿中被加裝束或作、爲被籠法花堂御厨子、以工藤右衛門入道果禪、昨日被送之、入赤地錦袋、仍令隨身(進)、奉籠御堂之狀如件、
弘安九年十二月五日 (花押)(北条貞時)
別當法印公朝

ちなみにこれ髭切が出てくる一次資料なので、安達組好きな方はぜひ押されておいてほしく……。そんなわけで、霜月騒動後に髭切を探していた時に鶴丸国永も見つけたんじゃないかな、なんて思っています。

墓に入る逸話については、意外と刀剣書にはあんまり出てきていないくて、なぜ陵丸かについても言及する資料は少ないです。『日本刀大百科事典』では「これを陵(みささぎ)または陵丸とよぶのは、城ノ太郎の墓から掘り出したから、あるいは城ノ太郎、または北条貞時の墓に掛けたからともいう。中国では季札が徐君の墓の木に、わが愛剣をかけて去った、という故事があるが、わが国には墓に刀をかける、という風習はないから、城ノ太郎つまり泰盛一族の墓から発掘した、というのが真相であろう。」としています。

でも別に誰の墓に入ったか明言されていないんですね。ふくみさんも言ってるんですが、安達氏の墓だったとして「陵(皇族の墓)」の字を当てるかは疑問。こうなったら「みささき」に墓以外の意味があるんじゃないかと思ったんですが、辞書も墓って言ってるし¹³、室町期の辞書にはなるんですが節用集見ても「みささき」は「陵」しかないし(頑張っても「諸陵頭」で「みささぎのかみ」と

¹² 神奈川県企画調査部県史編集室編(1973)『神奈川県史 資料編2 古代・中世(2)』神奈川県

¹³ みささぎ【陵・山陵】〔名〕(古くは「みさざき」。「みささき」もあるか)天皇・皇后などの墓所。御陵。みはか。(略)(日本国語大辞典12巻p.652)直後の見出しに「みささぎ 〔名〕鳥「みさご(鶲)」の別名」とあって、おやと思ったんですが、初出は1775年(物類称呼)だし播州の方言らしいです。そううまくはいかない。

みささぎ【陵・山陵】名 〔名義抄〕には「陵 ミサツキ、山(陵)ミサツキ」とある。天皇・皇后・皇太后・太皇太后的墳墓を言う。奈良時代までは円墳・前方後円墳・山形の塚などが一般的である。平安中期以後、陵上に卒塔婆(そとば)や石塔などを建てることも多かった。天皇陵には陵戸を置いて、諸陵司(しよりょうし)が管理した。(略)(角川古語大辞典第5巻p.477)

か)¹⁴。誤解かもしれないが、何かしら墓エピソードがあるか、別の国永の刀を混同しているかって感じです。佐々木氏延暦寺本銘尽(文明十六年銘尽)には「諸陵より掘出すゆえ名付ける」とも書いてあって、「諸陵」の響きが合っているのでもうちょっと掘り下げてみたさはあるんですが、まあ行き詰っています。そううまくはいかない。陵丸に関しては、「2-2-1.龍胆丸、陵丸について」で龍胆丸と一緒にもう少し突っ込んで考えてみています。

2-1-3.織田信長～御牧勘兵衛

空白期間①については資料がないのでわかりませんね。少なくとも今回調べてみて、かもしれないレベルとかネット情報も見当たらなかったので手がかりがなく……。銘尽成立後の情報がどういう風に追加されていくかもちょっとよくわからなかったですし。

そんなわけで安達氏、北条氏が所持した後は、一気に織田信長まで飛びます。次の所有者である御牧勘兵衛も、同じ資料に出てくるので一緒に見ていきます。名物帳(提出本)では、

鶴丸国永 銘有 長サニ尺五寸九分半 代三千貫 松平陸奥守 北條傳來之太刀也信長公に傳て御家来三枝勘兵衛工下サル鶴丸ト云子細不知

と、北条氏の後の所持者に織田信長、御牧勘兵衛が挙げられています¹⁵。織田信長がどこからか探し出して所持、その後家臣の御牧勘兵衛に下賜したのでしょう。御牧氏についてもふくみさんが調べてくださっています¹⁶ので、以下にまとめます。

御牧景則、尚秀とも。元亀3年(1572年)に家督を継ぎ、信長の傘下へ。このころに明智光秀が三牧家を含む旧幕臣勢を家臣にし始めており、明智光秀の家臣とも言われるのはこのためか。秀吉家臣の時期もあり結構な事績がある。仕事ぶりが真面目で実績もあるようで、家康からの信頼もあった様子。慶長4年(1599年)没。所領を継いだ息子の助三郎信景も1年程で病没。御牧村や伏見近郊にいた時期があり、藤森とも近いか。子孫に四手井氏がいるそうです。

織田信長、御牧勘兵衛が所持した頃はあんまり情報がなく、本当に持ち主の情報くらいですかね。両者が所持した際の逸話も、今回調べた限り出てきませんでした。ただ、他に違うことを言っている資料もなく、何か齟齬があるわけでもないので、織田信長・御牧勘兵衛所持については特に否定する材料もなさそうです。

2-1-4.空白期間②

その後空白期間②に入ります。といっても、所持者が確定していないだけで、逸話は残っています。ただちょっとややこしくて、この期間に関する話が2種類あって、御牧氏の子孫が持っていて本阿弥家に発見された説と、藤森で発見された説があります。それぞれ根拠となる資料と一緒に見ていきましょう。

¹⁴ とりあえず印度本節用集の記載を載せます。文明本もあったんですが大差ないので省略。

【礼 人倫】陵遲(レウチ) 一夷(イ) 陵ハ築山ミサジキ也夷ハ平也一ノ字ノ意ハ平々(ハイヽ＼)ト成テスクレタル兒也(永禄二年本・九九p.217)

【美 天地】陵(ミサトキ) (永禄二年本・一九二p.264)

【見 官名】諸陵頭(ミサトキノカミ) (堯空本・一八三p.425)

【見 天地】陵(ミサジキ) (堯空本・一八一p.424)

【礼 言語進退】陵夷(イ) 陵築山ミサトキ也夷ハ平也陵夷字意平ニ成クレタル兒也(弘治二年本・一一七p.62)

【見 天地】陵(ミサトキ) (弘治二年本・二三Op.119)

【礼 人倫】陵遲(レウチ) 陵夷(レウイ) 陵ハ築山ミサトキナリ夷ハ平也一ノ字ハ平ニメ成テスクレタル兒也(両足院本・一〇九p.526)

¹⁵ 安達氏のくだりはどの名物帳でもすっぱり消されています。安達氏所有の話の流布については、後述します。

¹⁶ <https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=6048542>,

<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=10856643#3>

まずは御牧氏の子孫がそのまま所持していた説から。こちらは「鶴丸由来記¹⁷」と、前田綱紀の家臣の日記(可観小説¹⁸、葛巻昌興日記¹⁹)に出てきます。ネットで閲覧できるのと、長いので引用は省略させてもらつて……。特徴的なのは、

- ・余吾將軍所持の話が生えてきている
- ・益忠の誤字
- ・鶴丸国永の長さの間違い

銘尽まとめた資料見てもらえばわかると思うんですが、余吾將軍は急に出てきた感がすごいですね。益忠は実際には忠益(本阿弥光常)で、この3つの資料で誤字が共通しています。また、鶴丸国永の長さも違っています(資料では二尺四寸九分半、実際は二尺五寸九分半)。写し写されたか、または見た資料が同じだろうと考えられます。

なお「蝶夢散人」「人見友見」が誰かはわかっていないません。また前述のように御牧勘兵衛には息子がいるので、「三牧氏無嗣子」の文言はちょっと怪しいんですが、すぐ亡くなつたからとするならギリいけなくもないのかな、という感じ。

葛巻昌興日記の方に関しては、さらに「右奥村兵部方より入御覽予取次之即刻被返下之也」とあり、「奥村兵部方」つまり奥村惠輝が関与しているのもうかがえます。持ち主かどうかについてはわかりませんが、もし持ち主ならなんでその後手放す(?)→刀商→伊達家ルートを辿るのか考へないといけないところ²⁰。

葛巻昌興日記は前田綱紀の出来事を書いた、前田綱紀家臣の日記ではあるんですが、このころは江戸にいたようなので鶴丸は別に加賀に出向いたわけではなさそうです。ただ見てすぐ返したと書いているあたり、前田綱紀は所持者ではないようですね。

さてもうひとつ、藤森で発見された説について。名物帳の提出本にはなく、後に本阿弥長根によって増補された、いわゆる副本に出てきます²¹。

松平陸奥守殿 鶴丸国永 銘有²² 長サニ尺五寸九分半 代三千貫 北條傳來之太刀也信長公御所持三枝勘兵衛へ被下貞享ノ頃力的ニ男出家一乘院伏見藤之森□□²³取出す神事等に借シ太刀に致す由也古キ拵モ傳來之書付モ出ル²⁴鶴丸ト云子細ハ未詳

本阿弥長根は芍薬亭長根ともいって、1767年生まれの人物です。つまり当代の資料ではないが、本阿弥家に伝わっている資料を元に書き加えたということで、こちらもソースとしてそれなりに信頼できそうではあります。こちらでは御牧勘兵衛が所持した後、「藤森より取出した」ことになっていますね。ゲームで言っている「神社から持ち出す」エピソードはここでどうか?

この記載は提出本にはのっておらず、後世に書き加えられたものらしいんですが、本阿弥家の人物である長根によるものなので一概に間違いとも言えない気はしています。ただこれ、「藤森」がどこか、「光的次男」が誰なのかとかわからない部分もあるみたいなので、他の資料にも出てくれると確実なのにな、と思うところ。あと「貸し太刀」もちょっとよくわからないですね²⁵。

¹⁷ 大日本刀剣史に収録されている(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1256324/1/282> 2025.8.26閲覧)。「伝来の書付」以下の部分。

¹⁸ 金沢市図書館ホームページ https://www2.lib.kanazawa.ishikawa.jp/reference/kakan/kakan_367.pdf(2025.4.3閲覧)

¹⁹ 『加賀松雲公 下巻』(<https://dl.ndl.go.jp/pid/781991/1/64>)64コマにちょうど抜粋されていた。

²⁰ まだちゃんと読めていないんですけど、どうもこの日記(貞享2年)よりも前には前田綱紀は本阿弥光温に刀剣を質入れ(借金)したり其の後借り換えたりしています。借金の理由や完済がいつかはわからないみたい。(セキレイさん「抄本 今枝民部直方刀剣名物調(大典太光世・富田江・前田藤四郎+平野藤四郎)」<https://wagtailw.booth.pm/items/5615500>)だとしても家臣に影響あるかも調べないといけない。

²¹ 東京国立博物館デジタルライブラリー <https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/3798>(2025.8.29閲覧)

²² 右側に何か書かれているが解読できず。「アイ□分也」? 卷末欄外に「朱 □ハ異本工有之由」と書いてあるが、鶴丸国永の項目のこの箇所で朱書きはされていない。

²³ 解読できず。「より」ではなさそう?

²⁴ 朱書きにて何か書かれているが解読できず。「但鶴丸記此□ノ入有之?」

²⁵ 少なくとも日本国語大辞典、角川古語大辞典、節用集、日葡辞書には項目立てされていない。

どちらの説が正しいかは、よくわかりません。御牧勘兵衛の子孫が所持し続けた説は同時代の資料ですし、藤森で取り出した説は本阿弥家の記録です。それぞれひっかかる文言があるにしても、齟齬がなければ採用していいレベルの信憑性はある気がするんですよね。

ただ流布という点でいけば、本阿弥長根が書き加えた名物帳が発刊されており広く普及しているようなので、藤森から取出された説が大正以降の共通理解なのかなと思っています。

2-1-5.伊達家～皇室御物

元禄年間に伊達家に「鶴丸国永」として購入されました。

この頃までに折紙が2つについていて、1684年に3000貫、1693年に金200枚です。なんで2回も折紙発行されているんだろうと思ったら、『本阿弥家の人々』によると、折紙発行手数料で儲けるために本阿弥家が再発行を奨励していたらしいです²⁶。ちなみに貫とか金は実際の価格ではないらしく、『本阿弥家の人々』では「錢とは普通、永樂錢のことで、金子一枚は永樂錢二十貫文に当たると説明されているが、実は永樂錢ではなく“当五錢”といって一文が五錢に当たる中国の古錢のことという。これの二百文が一貫、二十貫が金一枚にあたる。」とあり、『図説刀剣名物帳』では「金何枚は大判のことであり、錢何貫は大体のところ永樂錢のことである。金と錢の比価は金一両は錢一貫文にあてている(慶長の決まり)。また格付けの場合金五枚は錢百貫に相当するものと考えられていた。」とあります。ってことは金200枚は錢4000貫ということになりますね。値上がりしてゐるなあと思ったんですが、別に値上がりは鶴丸国永以外もされており別に珍しくないようです。ちなみに『本阿弥家の人々』では「折紙の枚数は時代とともに上がるので、代付を上げるために折紙がついていても、再度鑑定を求めて来る場合もあった。その時は、再度来たことを『留帳』に書き増し、前の代付を消し、新枚数を書き添えることにしていました。」とも書かれていたので、なんで鶴丸国永が名物帳に金200枚ではなく代3000貫で載っているかは謎²⁷。

伊達家での記録も残っています。「御宝物之部仙台家御腰物之帳²⁸」によると、

鶴丸国永御太刀²⁹ 元禄十六年八月 金二百枚銘有 長二尺五寸九分半
獅山様御入国為御祝儀宝永元年六月二十七日從 肯山様太田将監を以被進之 忠山様初而
御入国之節從 獅山様為御祝儀被進之
覚書 保元之頃村上太郎永守帶之其後清野三郎入道相伝其後城太郎持之弘安合戦の時失ひ
侍りしを北条貞時禪門崇圓尋出して所持其後信長公より三牧勘衛³⁰に賜之其後出家所持と云々³¹
右本阿弥家の書物に之有由本阿弥六郎右工門覚書あり

「本阿弥六郎右工門覚書」が「鶴丸由来記」みたいですね。伊達綱村から伊達吉村へ、伊達吉村から伊達宗村へ譲渡されているようです。その後は譲渡されなかつたんですかね？

あと、村上太郎永守や清野三郎入道が鶴丸国永を所持したことになってしまっている。「同作」の問題が……。ただ「鶴丸由来記」をまるっと写したわけでもないので、銘尽か何か「其後」で城太郎に繋がっている他の刀剣書を読んでいそうな感じもありますね。

²⁶ 伊達家が何年に購入したかはわからず、元禄頃という記載しか見当たりませんでした。購入してから2枚目の折紙を発行したのか、2枚目の折紙を発行してから購入したのか、資料ないかなーと思うところ。

²⁷ そんな感じで値段が上がつたり偽物を本物として折紙を発行することも増えたらしく、折紙の信頼について『本阿弥家の人々』では「本阿弥家の折紙でも、十三代・光忠以前のものを“古折紙”として珍重する。鑑定が厳格で信用がおけるからである。」とされています。ただ光忠の折紙発行は1696～1725年らしく、鶴丸の折紙は信用に足るようです。なので本当に謎。写し間違いとか？

²⁸ 東京国立博物館デジタルライブラリー <https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/228/49> (2025.9.6閲覧)

²⁹ 見出しに朱丸、欄外に朱書で『伊達宗基伯之献上今ハ宮中有御物』、墨書で『山城国三条住兼長子治歴之頃』と書かれている。朱書がいつ追加されたかはわからないけど、朱書があるのは鍋国行、太鼓鐘貞宗、大俱利伽羅、鶴丸国永だけ。

³⁰ ママ。

これを見るに、獅山様＝伊達綱村が太田将監を通じて吉村に贈る、とありますが、この当時はとてもごたごたしている時代です。綱村隠居前となると、財政も逼迫していそうなので、わざわざ鶴丸を購入する必要ってあるのかなとも思ったり。代替わりにおける刀剣贈答の良い資料、何かないですかね。

さて、鶴丸国永の主である伊達吉村は治世40年と長いものの、就任当初は伊達藩の財政は破綻状態にあったようです。立て直しに成功した名君のようですが、とはいえた当初は解決すべき問題も山積みだったのではないかでしょうか。新しい主の元へ行った折からそんな感じとは、なかなか驚きに絶えませんね鶴丸国永。

その後、明治34年に伊達宗基伯爵より明治天皇に献上されます。

『皇室の至宝³¹』の解説では、鶴丸国永の写真や実物の解説とか法量とかがのっていました。3箇所の薔薇があるらしい、とも聞いたんですが、実物への知識はありませんわからずじまい……悲しい。ただ銘を見て「本当に特徴的な國の字だ～」とテンション上がってました。

まだ御物っぽいというネット情報は見かけました。2009年には東京国立博物館でも展示があつたようで、目録に「太刀 銘 国永(名物鶴丸) 五条国永作 平安時代・12世紀 御物」とあります³²。少なくともこの時期までは御物確定ですね。作刀時期が12世紀?って感じですが、これは後述します。

2-2.その他個別の検討

歴代の持ち主を見る流れでは横道に逸れてしまうものや、もう少し深掘りして考えてみたいものについて個別に章立てしました。私の興味の向いたところだと思ってもらえば。

2-2-1.龍胆丸、陵丸について

鶴丸国永の号は、文献に出てくるのは「龍胆丸」「陵丸」「鶴丸」があります(文献によって表記は色々)。由来はよくわかっていないよう。また、同一説も別物説も見かけたので、せっかく色々資料を見たし、比較検討してみることにしました。結論からいって「鶴丸含め号の由来に逸話の揺れはないけど確かにことは言えない、でも龍胆丸陵丸鶴丸は同一の刀と考えていいんじゃないかと思う」って感じです。

銘尽は刀工がメインなので、刀まで言及するのは一部なんですが、出てくる文献と関連する記載(室町時代以前)を抜粋してまとめると以下のようになります。すべて出てこない資料は省略しました。

資料	龍胆丸	陵丸	鶴丸
喜阿弥本銘尽	りんどうと名づく。太刀の鞘にりんどうを透しにしたる故なり。	×	×
鍛冶名字考	竜膽ヲサヤニスカシタル故ニリロタウトナツク	又ミサトキトモ云	又鶴丸ト号ス
能阿弥本銘尽	竜胆(りんどう)を鞘に透すによりて竜胆と名づく。	またみささきとも云うなり。	×
後鳥羽院御宇鍛冶結番次第	リンタウヲサヤニスカス故リンダウト名付ケ	又ミサトキトモ云ナリ	又ツル丸トモ号ス

³¹ 每日新聞至宝委員会事務局編(1991年)『皇室の至宝 4 御物』毎日新聞社

³² https://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=77#7(2025.9.9閲覧)

	リ		
後鳥羽院御宇番鍛治之次第	りんたうをさやにすかす故に故りんたうと名付けり	又みさゝきとも云けり	又つる丸とも号す
佐々木氏延暦寺本銘尽(文明十六年銘尽) ³³	相模禪門崇廣名付之貞時尋出持之龍膽ヲヤニスカス故竜膽	諸陵ヨリ掘出之間諸陵名付之	鶴□ ³⁴ 名付
吹毛抄	リンタウヲサヤニスルユヘニリンタウト名付ク	又ミサゝキトモ云ケリ	又鶴丸トモ号ス
享禄比写刀劍書	りんだうをさやにするゆへにりんだうとなづく。	又みささぎともいうふ也。	又う丸 ³⁵ ともがうす。
鍛冶銘文集	リンタウヲサヤニスカス故ニリンタウト名付	又ハミサゝキトモ云ナリ	又鶴丸トモ云ナリ

写本の系統とかちょっとわかっていないので、古いからとか数が多いからとかはあんまりあてにならないのは念頭においておくとして。菊丸についてはまったく追えなかつたのでそこも今回は考えないものとして。

龍胆丸はすべてにあるのと、鶴丸がある資料には陵丸もあるのがわかります。また掲出順は必ず龍胆丸→陵丸→鶴丸でした³⁶。諸本の系統や派生関係はわかりませんが、たぶん祖本レベルで早い段階に龍胆丸の記載があった、陵丸はどの段階からあったか微妙、鶴丸は後世になつて増補されていそう、って感じですね。鍛冶名字考に鶴丸とあるので、享徳元年(1452年)には資料に見える、という程度でしょうか。喜阿弥本銘尽は、翻刻した本間氏によれば写本を重ねており明治期以降に写されたものだろうとのことです、それにしては陵丸、鶴丸のことが書かれていないのはポイントかもしれません³⁷。

鶴丸の号については、こうやって見てもなぜ鶴丸というか書いてある資料はなく、むしろ名物帳でわからないといって言われているくらいなので本当にわかりません。福永氏は鶴丸紋があつたんじゃないかなと述べられています。霜月騒動時には鶴丸じゃなかつた可能性がありますね。

龍胆丸については、龍胆を鞘または錆に透かすから竜胆らしく、いくつかの資料で散見されます。鞘と錆の差はあるとはいえ、他の由来が書いてあるわけじやなし、鞘や錆が失われることもあるからって感じであえて突っ込んで調べる意味はないかなと思います(宗近作の蝶丸も透かすゆえ蝶丸らしく、そんな号のつけ方は他でもされているみたいです)。

陵丸についても、由来について書かれているのは少なく、「諸陵より掘り出だすから陵丸」という記述も見えますが、墓から掘り出すエピソードは先行研究からいってそもそも墓に埋まるのは無

³³ おそらく資料に誤字等ある。「龍膽ヲヤニスカス」(「サ」ヤニスカスなのでは?)とか、「名付之」の位置(「相模禪門崇廣名付之貞時」ではなく「龍膽ヲヤニスカス故竜膽名付之」なのでは?)とか。

³⁴ 損傷あるが「丸」みある。

³⁵ 「鶴丸」の誤りか。

³⁶ 孫引きになつちやうんですが、ふくみさんが翻刻した銘尽資料一覧にあるのもこの特徴が当てはまりました。

³⁷ ふくみさんは能阿弥本銘尽(和鋼博物館蔵、私は見れていない資料です)に①城太郎以下の来歴がないが「みささぎ」が載っていること、②銘の位置や国(の字)の違いも合わせると「りんとう」「みささぎ」と呼ばれたのは村上太郎長盛・清野三郎入道所持の刀で、鶴丸とは別物だったのではないか、としています。①他の写本は城太郎と陵がセットor城太郎はあるが陵はないので、写本の1つだけで断定はできない(脱落が十分考えられる)のと、②銘の位置や国(の字)の違いも、切り方色々あるみたいですが、それが龍胆丸・陵丸・鶴丸についての切り方であるという文脈にも見えないので、ちょっと論拠薄いかなあと思っています。

理がありそう……。「ミササキ」「ミサザキ」を=陵にしていいかについては、「ミササキ」「ミサザキ」の音で節用集を調べた限り陵の字しか出てこなかつたので、ミササギ=陵で考えて良さそうです。

龍胆丸、陵丸については、まず鶴丸と同一の刀を言っているのか、国永の別の刀を言っているのか問題があるらしいです。とはいへ別物だったらほぼ全部の資料で言い回しや掲出順が一緒とは思えないので、同一なんじゃないかなあと思っています。これについてはもうちょっと検討していきます。

ちょいと調べた限り①陵の漢字の意味②竜胆に「陵游」という別名がある③資料の書き方あたり調べれそうだな、ということでそっちも深掘りしてみました。①②に関しては語の意味や語そのものに混同がないか、③については他の刀工の記載の形式もみてみよう、という試みです。

①陵の漢字の意味から、大漢和で調べてみたところ、

陵①大きいおか。②おか。③つか。みささぎ。④しのぐ。麥に通ず。⑤ゆるむ。おとろえる。⑥せまる。⑦おそれる。⑧きびしい。⑨とぐ。⑩せんざんこう。⑪姓。

凌①のる。麦に通ず。②馳せる。③しのぐ。わけ行く。④おかす。⑤おそれる。⑥凌に通ず。⑦川の名。⑧姓。

凌①こほり。②こほりむろ。ひむろ。③おののく。おそれる。④しのぐ。麦に通ず。⑤かける。⑥あらい。あれら。⑦ませる。⑧氷が盛りあがる。⑨凌に作る。⑩姓。

往々にして編なんて混ざるので「凌」「凌」もセットで載せました。墓に埋まっていないにしても、何か墓関連ないかなと思うんですけど、まあ他の字含めても「陵」のみささぎくらいしかなさそうですね。

龍と陵で音的に混ざらないかなとも思ったんですが、反切的には違います。ちょっと音については詳しくないんですが、まあでも龍丸とかで出てきている資料もなし、龍と陵単字で混ざる可能性はなさそうかなと。こっちの説は無理そう。

②竜胆に「陵游」という別名がある、に関しては、大漢和を見ると「【陵遊】竜胆の異名。りんだう。」とのことで、本草にのっているみたいです³⁸。漢字の共通具合は良さげ。というわけで日本でも通用するのかなと思って本草和名の記載を見てみると³⁹、「龍膽 陶景注云味甚苦故以膽為名 一名凌游(陵游) 和名衣也美久佐 一名尔加奈」とありました。たしかに「陵游」がのっていますね。和名に「ニカナ」「イヤミクサ」もあるらしい。

游も龍もある、と思ったんですが別にこの記載をもって「陵」とは混ざらなさそうだな……。あと丸山氏の解題⁴⁰に本草和名は「13世紀以降は使用されることもなく、忘れられた存在であった。」とあって、そもそも本草和名を根拠にするのは決め手に欠けそうでした⁴¹。また、「龍胆」で辞書を引いても他に関連のありそうな記述はなさそうでした⁴²。

脱線しそぎましたが、以上より①②で語の混同は別に起こらなさそうでした。こじつけできなくはなさうだけど刀の号として「竜胆」から「陵」を導き出す、あるいは「陵」から「竜胆」を導き出すのは無理がある、ということですね。これだけやっておいて何ですが、これを混同するには字面だけの解釈になる(口頭で伝承されている可能性を加味していない)ので、ご時世的にちょっと無理があるかなとも思います。まあ逆に言えば龍胆丸と陵丸は別の逸話から号を受けられたと考えていって事になるんじゃないですかね。同様の手法で鶴も導き出せないので、やっぱり龍胆丸・陵丸・鶴丸で混同はなさそう⁴³、当時からちゃんとそれぞれで認識されてたような気がします。

³⁸ 大漢和、「龍遊」も掲載されていたんですが、「①龍が遊ぶ。②縣名。」ということなので関係なさそう。

³⁹ NDL <https://dl.ndl.go.jp/pid/1021074/1/34>(『日本古典全集 本草和名 上』)ついでに和名抄の竜胆の項も見たんですが本草を引用していました。

⁴⁰ 丸山裕美子・武倩編著(2021)『本草和名 影印・翻刻と研究』汲古書院

⁴¹ あと銘尽を所持する層が本草和名を所持して熟読するかというと、さすがに分野が違いすぎるような感はあります。

⁴² 日本国語大辞典、角川古語大辞典の「龍胆」(りゅうたん・りんどう)確認済み。

⁴³ ここまでやってから気づきましたが、もし混同しているなら、龍胆丸はあるけど陵丸はない、鶴丸はあるけど陵丸はない、みたいなバラバラの分布になるはずなのでは……となっていました。分析って大事。

③資料の書き方では、資料論の話になるんですが、たぶん国永だけ眺めていても解決しなさそうな気がしてきたので、他の刀工に目を向けてみました。国永以外の項目で号が複数書かれている刀工はいるか、そこでの記載はどうなっているかについて調べていきます。つまり、村上太郎・長盛・清野三郎入道の刀=龍胆丸・陵丸、城太郎の刀=鶴丸だとするならば、今回調べた各資料の書き方は「Aの刀の来歴、Bの刀の来歴、Aの刀の号、Bの刀の号」をしていることになります。「Aの刀の来歴、Aの刀の号、Bの刀の来歴、Bの刀の号」もしくは「Aの刀の号、Aの刀の来歴、Bの刀の号、Bの刀の来歴」の方がわかりやすく、事典として適切なのではと考えられます。

本来ならば龍胆丸・陵丸・鶴丸の記載がある刀剣書をピックアップ→その刀剣書で2つ以上号が掲載されている刀工をピックアップ→翻刻して内容を検討、までしないといけないというのはわかっているんですが、ちょっと労力すごそうなので内容検討はせずあくまで書き方を分類するという簡易調査にしました。すみません。余力あれば頑張ります⁴⁴。

ふくみさんが各銘尽の記載を載せてくれているので⁴⁵、ここで宗近の記載を見て、①「Aの刀の来歴、Bの刀の来歴、Aの刀の号、Bの刀の号」と来歴と号で分けて書かれているのか、②「Aの刀の来歴、Aの刀の号、Bの刀の来歴、Bの刀の号」もしくは「Aの刀の号、Aの刀の来歴、Bの刀の号、Bの刀の来歴」と刀ごとでまとめて書かれているのかを分類していきます。これ以外(号が1つのみ掲載など)の場合は③としました。また、刀の来歴は逸話や号の由来、所持者の記載があった場合に該当することとしています。以下の表にまとめました。

資料名	宗近の記載の分類
喜阿弥本銘尽	②(「一条院御作という太刀」、蝶丸=石動の逸話)
鍛治名字考※宗近の項目が2箇所にある	③(鶴丸 ⁴⁶ 掲出のみ) ②(鶴丸剣、蝶丸の逸話、不動の逸話、義朝→牛若殿の太刀の逸話)
能阿弥本銘尽	③(鶴丸掲出のみ)
佐々木氏延暦寺本銘尽(文明十六年銘尽)※宗近の項目が3箇所ある	②(蝶丸の逸話、不動の逸話、小狐の逸話) ③(畠山莊司重義太刀のみ) ②(ただし「昔鍛治靈劍作者事」なので項目立ては別かも?)
吹毛抄	②(蝶丸の逸話、不動の逸話)
享禄比写刀剣書	②(蝶丸=不動の逸話、小狐の所持者)
鍛治銘文集	②(蝶丸の逸話、不動の逸話、鶴丸)

⁴⁴ 喜阿弥本銘尽、能阿弥本銘尽、享禄比写が翻刻されていて全体を見やすいのでこれで探してみたところ、宗近(蝶丸、鶴丸、石動、不動、小狐)、包平(小手丸、蒲穂、箱王丸、金ノハカリ)あたりが3本共通して複数刀の号が掲載していました。宗近は吉家と同一人物とするか別人とするかもあるんですが、まあ一応宗近で調査する根拠はありますという気持ち。

⁴⁵ 「鶴丸来歴表+銘尽一覧表」<https://www.pixiv.net/artworks/61972153> 「後鳥羽院御宇鍛冶結番次第」「後鳥羽院御宇番鍛冶之次第」は見ている資料が別っぽかったので割愛。

⁴⁶ 三条宗近or吉家の太刀に「鶴丸」というのがあるんですが、これ鶴と字面似てるんですよね(実際誤記されているのも見る)。「みさご丸」って書かれている資料もあって、あと安達泰盛所持→弘安合戦→紛失という流れもあるとのこと。字面と音と来歴で混ざる可能性はありそうだなーと思います。証明はできないのであくまで所感なんですが(元物語に出てくるのでこっちも知名度もありそつかなとか)。あと保元物語によれば髭切、吠丸と面識があるかもしれない)。

これもまた蝶丸＝不動とするかどうか、みたいな問題があるみたいなんですが、一例をあげると、鍛冶名字考では「同鶴丸鉢ヲツクレリ此作太刀鎌倉ノ權五郎景正帶之仍七代ノ孫ノ長江ノ八郎左衛門景近コレヲ伝テ蝶丸ト名ツクハトキニ金蝶ヲホリツケタル故ナリ又彼ノ作太刀越後国城太郎貞重次資持富国奥山ノ館ニ不動明神トアメテ最後ノ時帶之其後四十餘年ヲヘテ宝殿ノ中ニスコシモサヒスシテアリケルヲ和田ノ次郎左衛門尉宝殿ヲ造力工畠地三段永代令寄進此太刀ヲ申ケテ不動ト名ツテヒサウス」となっていて、この後に義朝→牛若殿の太刀の話⁴⁷がでてきます。鶴丸剣、蝶丸の逸話、不動の逸話、義朝→牛若殿の太刀の逸話となっているので②の分類としました。

っていうのも踏まえて、ちょっとサンプル少ないとはいえ、この表を見ると①「Aの刀の来歴、Bの刀の来歴、Aの刀の号、Bの刀の号」の形式が一切ないのはやはりポイントなんじゃないかと思います。例えば上記の蝶丸と不動は「鎌倉權五郎景正と七代孫の長江八郎左衛門景近が此の作の太刀を持っていた、また彼の作の太刀を城太郎重次資持が不動明神としてあがめて40年後まで少しも鏽びずにあった。鋸に金蝶を彫りつけたから蝶丸と名づく、又不動ともいう」みたいな記載にはならないんですね。来歴と号がしっかりひとたまりとして出てきているものばかりならば、「竜膽ヲサヤニスカシタル故ニリタウトナツク又ミサトキモ云又鶴丸ト号ス」とされている時、龍胆丸＝陵丸＝鶴丸、と同一の刀と見ていいのではないでしょうか。

複数の資料を見ても偏っているので、やっぱり①「Aの刀の来歴、Bの刀の来歴、Aの刀の号、Bの刀の号」の形式の書き方はされていなかったのではないか。つまり龍胆丸・陵丸・鶴丸は同一の刀の別の号という考え方でいいんじゃないかな、と個人的に思っています。思ったよりきれいな結果が出そうなので、他の資料や他の刀工まで広げてもうちょっと根拠固めてもいいかも。

だいぶ急ぎ足になってしまったんですが、3つの方法でアプローチしてみました。龍胆丸・陵丸・鶴丸を語の上で混同してしまったわけではなさそう、でも資料の書き方からすると同一説の蓋然性を高めれそうだなと思っています⁴⁸。そんなわけで、私は鶴丸は3つの号を持っていた派です⁴⁹。

2-2-2. 安達氏所有の話の流布

ここは大事なので深掘りします。

資料をまとめていて気づいたのですが、銘尽などには出てくる安達氏（「城太郎」）所有の話は、今回確認した限りでは江戸期の版本や名物帳ではさっぱりなくなっています。鶴丸由来記や可観小説は江戸期の成立ですが、流布という点で見ると、これは重要なポイントかなと。

写本に比べ、版本は圧倒的な数が出回っています。流布するならば写本よりも版本なのですが、鶴丸国永に関する記載は少なくなっており、安達氏所有の話は見当たりません。また、名物帳は江戸期には版本ではなく、『本阿弥家の人々』によれば星野本をいわゆる流布本としています。今村長賀が星野求与本を明治36年8月号から月刊誌『刀劍会誌』に連載開始（ただし会員限定）し、名物帳の存在が公表。高瀬氏（三宅本、松崎本、西垣本を所持）が星野本を参照しながら『詳註刀劍名物帖』を、「星野本」を底本に『刀劍名物蝶』（中央刀劍会刊大正15年）を出版、「流布本」となったようです。つまり名物帳が流布したのは大正期。意外と最近ですね。

⁴⁷ これはちょっと何かよくわからない…。

⁴⁸ なんでこんなに頑張っているのかというと、鶴丸＝龍胆丸ならば、源氏の家紋である笹竜胆と要素が被っていて良いなという下心があるからです。いえ頼朝の時代に源氏は笹竜胆使ってなかった説もあるらしいんですけど。

⁴⁹ のちのち鶴丸が残っていくのは、本阿弥家の鑑定も関連しているのかなと思います。名物帳で安達氏の記載が消えたのと、竜胆も陵も消えているのは、なにかあるんじゃないかなと邪推しています。なおこれに関しては根拠はないのでお気持ちです。

なぜ安達氏所有の話が消えたかは不明です。別に刀剣人気がなくなったとも思っていなくて、版本で刀剣書は新しいものがどんどん発刊されていますし⁵⁰。名物帳が作成されてたくさん写されていることから、各刀剣の情報もまだ求められていると思うのですが。あるいは「城太郎」がこの時点でもう何者かわからなくなっていた(だから情報として載せられなかつた)傍証となるのでしょうか。だとしても霜月騒動のくだりまでなくなる理由もないんじゃないかと思います。

ということは、です。江戸期において、鶴丸国永は安達氏所有であるという認識はそれほど広まっていないはずです。銘尽を個人で所持できるほどの人物ならともかく、一般民衆まではその情報はおそらく入ってこなかつたでしょう。もしこの頃に刀剣男士となつていた場合、安達氏所有の逸話を持つていなかつた可能性があります。

安達組が成立しない！ 大変だ！

ただこのまま失つてしまふわけではありません。大正期に入り、「詳註刀剣名物帳：附・名物刀剣押形増補⁵¹」では安達氏所有の記載が出てきます(といつても「秋田城介」の記載で霜月騒動について触れられてはいませんが)。良かった。

あるいは「可觀小説」とかを考慮すれば、ちょうど安達氏所有の話がなくなりかけていたのは伊達家にいる時期と言っても過言ではないですね。まあ『御宝物之部仙台家御腰物之帳』には安達氏所有の話が載つてゐるので、伊達家では承知されていた話だつた可能性はあるんですが。

ともかく、蓋然性の高い安達組の幻覚を見ようとしている人間にとっては大事な情報です。後述でキャラ解釈に落とし込む材料とします。

2-2-3. 現存刀

何度も言つてゐる通り鶴丸国永は現存刀です。実物の情報も見てみましょう。以下『皇室の至宝』の情報です。

・作風は小板目肌がよく約み冴えた地鉄に焼出しそり沸映りが棒状にくつきりと立ち、直刃調の小乱刃がよく沸えて、足・葉など複雑に働き、刃中二重刃風となり金筋入る。

・この鶴丸国永の銘字には特色があり、国字のクニガマエの中が×に一となる。腰元より茎にかけて強く反る太刀姿はいかにも古雅であり、茎が雉子股と呼ばれ、刃方を段をつけて細く削いでいるのは、柄に俵鉢と称する飾りを施した太刀拵がつけられていたためであろう。それに鶴の文様があつたのではなかろうか。

〈法量〉刃長七八.六cm 反り二.七cm

〈形状〉鎬造、庵棟、腰元から茎にかけて反り高く、踏張り付く、小鋒。茎は生ぶ 先細くなり栗尻、鑓目勝手下がり、目釘穴一つ。佩表目針孔上棟寄に二字銘。

〈鍛〉小板目肌よくつみ冴えて、地沸つき、地沸映り棒状に焼出より立つ。

〈刃文〉直刃調小乱小丁子刃となり小沸つき、足・葉よく入り刃中複雑に働き、刃中二重風となり、物打はとくに金筋交じる。帽子刃はわずかにのたれて、先はきかけてわずかに小丸に返り、金筋かかる。

残念ながら私はこの情報を見てもピンと来ていないんですが、写真も掲載されているのでそつちで楽しむことはできるかなと。あと刀剣用語と実際の状態があまり結びついてない人間からすると、文字情報になつてるのは大変ありがたいです。今回はできなかつたんですが、今後余力があれば茎図や押形のある資料と比較してみてもいいかなと思っています。というのも、資料によれば銘の切り方に特徴があるらしいので、何か情報が得られるかもしれません。

銘尽などの資料からは天喜とか長暦(1037年～)とある国永ですが、作刀時期について、『皇室の至宝』の解説では「備前鍛冶の作風と比較して十一世紀後半から十二世紀前半の鍛冶とみてよいであろう。」とされています。えっサバよんでるんですか？ じゃあ三条宗近はどうなんだつ

⁵⁰ 鶴丸国永の記載は見当たらぬんですが、「古刀銘尽大全」とかだと巻末に「古代名物之劍」で刀剣を見出しの項目としてまとめられていたりします。ちなみにこれ、「薄緑」「髭切膝丸」「鬼切」で別の項目になつて面白いので、興味ある方はぜひ。

⁵¹ NDL <https://dl.ndl.go.jp/pid/951684/1/62>(2025.8.29閲覧)大正8年の方。

て話なんですが、『国宝 東京国立博物館のすべて⁵²』を見ると「10~12世紀」となっていて、これも通説よりも時期の幅が広くなっていますね。国永に限らず、同時代とされている刀工全体に言える問題みたいです。

作風とかはちょっとよくわからんのですが、まあ霜月騒動よりは前だし、国永の太刀を佩いたという村上太郎長盛や清野三郎入道も時代的に齟齬はないので、専門家に任せて今後の研究待ちかなといったところ。

こういう視点から研究ができるのも、実物があるからこそですよね。

4.解釈

以上の調査も含めつつ、ゲーム内の鶴丸国永というキャラクター解釈をしていきたいと思います。ただ今まで以上に言うことが徒然なるままに状態なので、覚悟してどうぞ。またゲーム内での台詞や修行の手紙にも触れますので、ネタバレもあります。ご注意ください。まずは公式での紹介文から。

平安時代の刀工、五条国永の在銘太刀。鶴を思わせる白い衣を身に纏い、赤は戦ううちにつくだろうからなどと軽く言ってのける。そのさが、軽妙で醉狂であっても戦うことを忘れたことはない。(公式サイトより⁵³)

初手からで申し訳ないんですが、今回調べた資料には「国永」とか「四条弥太郎」表記のものがほとんどで、「五条国永」って文字列はほぼないんですよね。まず刀工情報から疑義がある⁵⁴、愉快な鶴丸さん。

在銘太刀っていうのもポイントですかね。わざわざ「在銘」というのを強調しているのは、現存する刀剣に国永の銘が刻まれたものが少ないからでしょう。銘があるというのは珍重されたようで、鈴木氏の論文⁵⁵では色々な記録で銘に関する記事があるとして、「中世、特に鎌倉末期から室町期にかけては、刀剣が意識されるときや作者や銘にまで関心が及び、とりわけその優劣に関する興味の大きかったことが認められた」としています。特に国永は注進物ですね。

鶴丸という号がついた理由はわからないし、鶴丸(とか鶴という号がつく刀)は他にもいるのに、なんでそんなに鶴に愛着もてるんだろう……。あと「鶴を思わせる~」の一文、単に鶴であることをアピールしたいと思うんですけど、安達組スキとしては動搖しちゃいますね。えっそれ法華堂に納められた髭切のシチュをなぞっているんですか? 爆裂地雷じゃない?

軽妙で醉狂というか、ほぼ驚きキャラになってますね。ただ悪い意味での驚きは嫌っているみたいなので⁵⁶、誰かを傷つけるよりは笑って済ませられる程度の刺激と考えています。ということは、その度合いをはかることができるくらいには、相手の気持ちも考えられる刀ってことですよね。ちゃんと根底に優しさが垣間見える感じがします。あとは仕込みもしているようなので、凝り性なのかも。

戦うことを忘れたことはない、は戦闘で使われていたらしい記載があるからでしょうか⁵⁷。また、鶴丸国永に限りませんが、国永の太刀は注進物に選ばれていますから、切れ味も保証されています。化物を斬ったとかの逸話はほぼない、太刀だからおそらくだんだんと戦闘での使用は少な

⁵² 東京国立博物館、毎日新聞社編『東京国立博物館創立一五〇年記念特別展 国宝 東京国立博物館のすべて』(2022年)

⁵³ <https://www.toukenranbu.jp/character/130/> (2025.3.20閲覧)

⁵⁴ 今後もうちょっと深く調べようと思っているんですが、「五条国永」に疑義があるのに加えて、ちょこちょこ中島来国長と混ざってそうな感じあるんですよね。『日本刀工辞典 古刀篇』ではもうすごいことに。これ昭和の本なんですって。

⁵⁵ 鈴木雄一(1994)「重代の太刀:「銘尽」の世界を中心に」『文学史研究35』

⁵⁶ 中傷手入れ台詞「悪いねえ、これじゃあ悪い方の驚きしか、提供できそうもないんでな……」

⁵⁷ 「鍛冶名字考」に弘安の合戦の時多く人を斬った話が出てくる。といつてもこれ以外ほぼ見えない。信憑性は知らない。

くなつていつただうと考へると、やっぱり現存太刀があるが故のキャラ付けができるんじやないかなと。

では刀帳台詞も。

鶴丸国永だ。平安時代に打たれてから、主を転々しながら今まで生きてきた。ま、それだけ人気があつたってことだなあ。……ただなあ、俺欲しさに、墓を暴いたり、神社から取り出したりは感心できないよなあ……

墓エピソードは眉唾、と言つてはいましたが、鶴丸が刀帳台詞で掘り出されたって自己申告しているのでキャラ解釈では採用するつもりです。まあ「霜月騒動のとき」「安達氏の誰かの」墓から暴かれたとは言つてないですし。修行の手紙ではさらっと「貞時が墓を暴いた伝説がある」程度に濁されているんですが⁵⁸。あるいは審神者たちの認識で存在がちょっと変わったのかなとも邪推しています。流布という点で言えば、この刀剣乱舞ブームやネットでの情報拡散とかの話も当てはまりますからね。

神社から取り出されたとも言つてはいますが、これはたぶん名物帳の「藤森から取出した」という記載を藤森神社と解釈しているのかなと。この2つのエピソードについては、「鶴丸国永を欲しがり強引な手段を使う権力者がいた」「それに関して鶴丸自身は評価していない」を強調するための話なのかなと思います。というか、歴代主たちがそうそたる面子なのに、逸話らしい逸話がそれくらいしかないとも言う。驚きは好きだけど、誰かの意に沿わなかつたり、強引な手段は嫌いなんですね。

修行の手紙1通目では明らかに『雪国』をなぞっているので、川端康成を読んでいるんですね。刀だった頃に知識を得ているのか、顕現してから実際に読んだのかはわかりませんが、文学を嗜む素養もあるんですね。好奇心旺盛ですし、こうやって色んなものをインプットしている姿が垣間見えてにっこり⁵⁹。

現存刀で号もあるけど、ワンチャン鶴丸国永をベースに顕現した国永の刀の集合体かもしれない。仮に龍胆丸と陵丸の別物説をとっても、内包していてもおかしくなくなるので。あとは菊丸もいるけど、逸話もほぼ見えないのでゲーム実装はないかな。現存刀も少しはあるらしい⁶⁰んですが、号はないし、兄弟刀の実装は望めなさそうなので、ここは永遠に謎のままかも。

来歴を見てきた通り、鶴丸国永の逸話というよりは元主たちの話が多い気がします。こういう過程で作られたとか化物を斬ったとかの話がない。つまり、物語と言っても実在の人物たちが所持していたというステータスの話であって、創作で足されたり曲げられたりする要素が少ないなと思います。刀剣乱舞の世界観では歴史改変という要素もあると考えると、逸話よりも搖らぎにくいアドバンテージを持っている気がします。

地に足付いてる、だからこそ刀剣男士の状態で好き勝手しても摇らいだりしない強みはありそうだな、なんて思っています。現存刀、絶賛されていますしね。

あとは極の長期留守台詞ですね。「いない間？ 僕は死んでたよ。何一つ変わらないんじや死んでるのと同じだろ」って……刀なのに死生觀あるんだ！ でちょっとドキドキしたのと、変化がない=死と思うくらいには自我や感性が確立してるんだなって……そういうところ、人間みあるなあと思います。ちなみににつつきすぎボイスでは自分のこと「怪我人」と言います。「人」って……！？

伊達家にこだわる理由って何だらうなと思った時、伊達家の刀剣たちへ好感があったのは前提として、その上ではっきり史実として地に足ついているからかな、とも。身もふたもない話ですが、じゃあ銘尽その他の話全部信じていいのかとかになってくるので……。鶴丸国永として確定できるの、折紙がついた後かなとも思うので(実際鶴丸は別の国永の太刀と混同されていないか、の

⁵⁸ 「俺を前の主の墓から暴いたって伝説が残ってる御仁」

⁵⁹ 今回は本論じゃないんで脚注に落としましたが、つまりこれ、『剣巻』あるいは他に髭切が出てくる文学作品も読んでるよねって話なんですよ。あらあらまあまあ。『剣巻』で描かれる時代>霜月騒動>『剣巻』成立が安達組のサビだと思っている人間からするとめちゃくちゃ重要情報です。

⁶⁰ 『皇室の至宝』解説より。あと国永かもしれない剣もクラウドファンディングで話題になつたね。

説も見かけるので。完全に否定できないのでね、なんともね。そんなこと言い始めたら鶴丸以外の刀もそうなんすけど)。史実と逸話の齟齬もない時期ですし、どっしり構えられる土台が自信に繋がりそうですよね。

とはいえた鶴丸は現存刀+国永の銘がある、っていうのが根底にあると考えているので、搖るぎない場所に根ざしたい気持ちがあるのかなと。御物ですか? さすがにセンシティブだから扱えなかったんじゃないかな……他の刀剣男士たちも現在の所蔵元のことには言及していないです。

また鶴丸国永の来歴を概観してみると、もうすでに驚きに満ちていたと思います。まずこれだけ有名どころの持ち主を転々としていますからね。貞時に関しては内政の面を修行で大変そうに言っていましたが、信長はさておき御牧家も続かなかつたし、伊達家も購入当初の政治環境だいぶやばいし。明治天皇もそうだよね……ってなると、鶴丸国永自身の逸話はあまりなくとも、環境はだいぶ目まぐるしかったんじゃないかな。ゲームの舞台である2205年でも、主も終わりの見えない戦争の最中という激動の中にいるわけで、歴代主たちを思うと平穏無事とは言えずとも、心が死がない、つらい状況を少し忘れていられるように、ってしてくれているのかもしれません。鶴丸なりの優しさというか、気遣いというか。

以上、今回の調査やゲーム内の台詞から考える鶴丸の解釈でした。次回は髭切も同じ手順で解釈した後で、安達組についてもどんどん触れていきたいと思っています。

5.今後の課題

冒頭の目的でも述べている通り、最終的なゴールは安達組の蓋然性の高い幻覚をみることです。それに向けて、まだ足りていない検討項目、今後取り組んでいきたいこととしては、優先度の高い順に、

- ・髭切の調査・解釈
 - ・孫引きになっている資料の原本確認(特にネット上で個人が出している情報)
 - ・明治以降の資料の調査
 - ・茎図や押形と現存刀の比較
 - ・号を2つ以上記載する際の順番
 - ・国永と中島来国長の混同はあったか
- あたりです。といっても、たぶんまた興味の赴くままに調べているような気もするのですが……。調べ物が進んだら、追記なり新しいまとめなりを作成予定です。

ここまでお付き合いください、ありがとうございました。何か参考になっていたら幸いです。

2025.9.13 くとう@910_ktn

2026.1.17追記:誤字訂正、ちょっとだけ資料追加あり。内容は変わっていません。Privatter、Xfolio(クロスフォリオ)で簡易版を公開しました。

6.参考文献

6-1.参考文献

○書籍・論文類

- ・上田万年、橋本進吉著(1916)「古本節用集の研究」東京帝国大学文科大学紀要第2(
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1871730>)※NDL、2025.2.27閲覧
- ・石井進(2004年)『石井進著作集 第4巻 鎌倉幕府と北条氏』岩波書店
- ・神奈川県企画調査部県史編集室編(1973)『神奈川県史 資料編2 古代・中世(2)』神奈川県
・さよのすけ(2022)『増補版 源氏兄弟考察本』(初版2016年)
- ・小学館国語辞典編集部編(2001年)『日本国語大辞典』小学館
- ・鈴木雄一(1994年)「重代の太刀:「銘尽」の世界を中心に」『文学史研究35』
- ・鈴木彰(2006年)『平家物語の展開と中世社会』汲古書院※うち「中世刀劍伝書の社会的地位相
—儀礼社会と「銘」に関する知識—」「重代の太刀の相伝—刀劍伝書の生成基盤と軍記物語—」
を国立国会図書館で遠隔複写して閲覧
- ・多田圭子(1988年)「中世軍記物語における刀劍説話について」『国文目白28号』
- ・辻本直男(2023年)『図説刀劍名物帳(縮刷版)』株式会社雄山閣(初版は1970年)
- ・でじたろう(2023)『刀劍乱舞絢爛図録四』株式会社ニトロプラス
- ・天理大学附属天理図書館編(1986年)『天理図書館善本叢書 和書之部第72巻の1』天理大学
出版部
- ・土井忠生・森田武・長南実編訳(1980年)『邦訳日葡辞書』岩波書店
- ・東京国立博物館、毎日新聞社編『東京国立博物館創立一五〇年記念特別展 国宝 東京国立
博物館のすべて』(2022年)
- ・得能一男(2016年)『刀劍書事典』刀劍春秋
- ・中田祝夫(1979年)『古本節用集六朱研究並びに総合索引[第1]改訂新版(古辞書大系)』勉
誠社
- ・中村幸彦編(1994年)『角川古語大辞典』角川書店
- ・福永醉剣(1993年)『日本刀大百科事典』雄山閣出版
- ・福永醉剣著、中原信夫編(2009年)『本阿弥家の人々』三協美術印刷株式会社
- ・藤田達生(2000)「刀劍書の成立:「諸国刀鍛冶系図写」を素材として」『三重大学教育学部研究
紀要 人文・社会科学』51巻
- ・毎日新聞至宝委員会事務局編(1991年)『皇室の至宝 4 御物』毎日新聞社
- ・丸山裕美子・武倩編著(2021年)『本草和名 影印・翻刻と研究』汲古書院
- ・間宮光治編(1983)『(財)日本美術刀劍保存協会付属刀劍博物館所蔵 和装刀劍古伝書等蔵
書目録』(財)日本美術刀劍保存協会
- ・諸橋轍次著、鎌田正・米山寅太郎修訂(1986年)『大漢和辞典 修訂版』大修館書店
- ・山西泰生(2008年)「安達氏における史実と物語—真名本『曾我物語』を中心として—」『佛教
大学大学院紀要第36号』
- ・吉原弘道(2018年)「「銘尽(龍造寺本)」から見える中世刀劍書の成立とその受容—申状土代
の裏に書写された現存最古の刀劍書—」『古文書研究第84号』
- ・吉原弘道(2011年)「重要文化財「銘尽(觀智院本)」の復元とその性格—中世刀劍書の祖型を
めぐって—」『九州産業大学基礎教育センター研究紀要1』

○その他ネットで閲覧した個人記事

・ふくみさん

「鶴丸国永 墓暴きエピソードだけ集積」<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=5410540>

「鶴丸考察 +前田家吉光移動年表」<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=6617832>

「【再投稿】鶴丸国永 銘尽一覧その他」<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=8400626>

「鶴丸国永 & 前田藤四郎 新史料紹介」<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=10856643>

「鶴丸来歴表＋銘尽一覧表」<https://www.pixiv.net/artworks/61972153>

・さよのすけさん

「霜月騒動考察まとめ—髭切と鶴丸国永—」<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=8916756>

・セキレイさん「抄本 今枝民部直方刀剣名物調(大典太光世・富田江・前田藤四郎+平野藤四郎)」<https://wagtailw.booth.pm/items/5615500>

○その他使ったサイト・アプリ

・NDL

・日本国書データベース

・名刀幻想辞典

・崩し字データベース

・みお(翻刻アプリ)

6-2. 資料名と記載箇所

刀剣書のまとめ、読めたところとか記載なかったとか気になるところメモとか。※参考※と付いているのは孫引き資料です。

資料名	鶴丸国永の記載箇所と内容
龍造寺本銘尽 ⁶¹	国永 ⁶² 【かちのせん後不同】国永 キク丸作
喜阿弥本銘尽(翻刻) ⁶³	【京鍛治次第不同】国永 在所菅原、此作保元乱の時、村上太郎長盛これを帶す。其後清野三郎入道これを相伝す。同作の太刀城奥州太郎持ちしが、弘安合戦の後、相模禪門崇道貞時尋ね出して所持す。りんどうと名づく。太刀の鞘にりんどうを透しにしたる故なり。国永という鍛冶世に久しくあり。上下あり。これを知る口伝あり。國の字についてならうことあり。 ⁶⁴ 国永 世に二人あり。昔の國の字短かく、後の國の字長し。大河原とも打つなり。 ⁶⁵
觀智院本銘尽	20コマ【日本国劍治銘】国永 埋焼茎ぶつ切也土目也長船流 【劍作鍛治前後不同】国永 菊丸作
鍛治名字考 ⁶⁶	【京都住鍛治等】国永 此作太刀保元ノ乱ノ時村上ノ太郎近国改名(アラタメ)長盛帯之清野三郎□道持之同作ノ太刀城陸奥ノ太郎近延之弘安ノ合戦ニヲク□ ⁶⁷ リ其後サカミ禪門崇□ ⁶⁸ 貞時帯之竜膽ヲサヤニスカシタル故ニリ□タウトナツク又ミサトキトモ云又鶴丸ト号ス此作ノメイハ目ヌキトリノ下ニウツフツウニアカリタリ世ニハ國永二人アリ此作ハ國ノ字ミシカシ今一人ハ國ノ字ナカシ此作ハ近則改名ナリ此作太刀十三振刀廿三腰日本ニアル宝物也
能阿弥本銘尽(翻刻) ⁶⁹	【山城国】国永 保元の乱の時村上太郎長持 ⁷⁰ これを帶す。その後清野 ⁷¹ 三郎入道相伝す。竜胆(りんどう)を鞘に透すによりて竜胆と名づく。またみささきとも云うなり。国永二代あり、この国永は國の字長し。 ⁷²
後鳥羽院御宇鍛治結番	【山城国】国永 此作ノ太刀保元ノ乱ノ時村上太郎永守コレヲハク其

⁶¹ 佐賀県立図書館データベースからPDFが見える。

<https://www.sagelibdb.jp/image/komonjo/60657/pdf/251584085633.pdf>(2025.6.5閲覧)吉原氏の論文に影印・翻刻あり。

⁶² 掲出のみ。

⁶³ 本間薰山「古伝書釈文」『刀剣美術』223-233号※喜阿弥本銘尽翻刻掲載

⁶⁴ 「國の字を二様書いているが、くずれているので省略する。」とある。

⁶⁵ 「國」の二字が図で挿入されている。

これとは別の箇所で、図が挿入された後に、「行国又菊丸を作る。奥州禪門相伝す。共弘安(図)を銘の上打つなり。」とある。混ざってる感じがしないでもない。

⁶⁶ 『天理図書館善本叢書 和書之部第72巻の1』に影印が収録されている。

⁶⁷ ちょっと見えるの「人」っぽい気もする。ヲク人キリ?

⁶⁸ 「彑十寅」

⁶⁹ 本間薰山「古伝書釈文」『刀剣美術』157-158,160-164号※能阿弥本銘尽翻刻掲載

備前国定利の項目で、「新羅三郎よりこれを相伝す。奥州禪門所持す。弘安合戦に失せる。」とされている。後半どこかで聞いたルートですね....。霜月騒動で行方不明になった刀、もしかして意外とあるのか? ただ備前の定利はネットで調べる限りヒットしない(綾小路ばかり出てくる)ので、詳細不明。

⁷⁰ 「(注)一本長時」と挿入されている。

⁷¹ 「(注)別本佐野」と挿入されている。

⁷² 「経眼した五条国永と伝えている二字銘の太刀が数口あってその銘振が四通りであるが、この記事によても少くとも二代説が古くからあったことが知られる。」とコメントされている。

次第 ⁷³	后清野三郎入道相傳同作太刀城太郎持之弘安ノ合戦ノ時相模禪門崇園貞時コレヲ尋出メ所持セリリンタウヲサヤニスカス故リンダウト名付ケリ又ミサトキトモ云ナリ又ツル丸トモ号ス銘ハ目貫ノ下ニ打之普通ニハカハリタリ此國永ハ國ノ字ミジカシ
後鳥羽院御宇番鍛治之次第 ⁷⁴	9コマ 國永 此作の太刀保元乃乱ノ時村上太郎永守是をは其後清野三郎入道相傳同作太刀城太郎持之弘安の合戦の時相模禪門崇園貞時是を尋出して所持せりりんたうをさやにすかす故に故りんたうと名付けり又みさときとも云けり又つる丸とも号す銘は目貫元の下ニ打之普通にハカハリタリ此國永ハ國乃字みしかし
佐々木氏延暦寺本銘尽(文明十六年銘尽) ⁷⁵	【京鍛冶事次第不同】国永 四条弥太郎 国字短シ備前長シ云 天喜比人迄 至文明四百十六年也 此作太刀保元之乱時村上太郎長盛帯之清野三郎入道相傳之同造太刀城陸奥太郎資持持之弘安合戦後相模禪門崇廣名付之貞時尋出持之龍膽ヲヤニスカス故龍膽諸陵ヨリ掘出之間諸陵名付之鶴 ⁷⁶ 名付之銘目貫下打之普通ニ替タリ同名備前在之其者比鍛冶後人也 【昔鍛冶靈劔作者事】相模守貞時相傳之 鶴丸京四条国永作 【各劍名人作】国永
長享銘尽(安田本) ⁷⁷	17コマ【劔ヲ造鍛冶前後不同】国永 菊丸作 19コマ【山城国京中ノ鍛冶平安城粟田口京中前後不同】国永 替州住代二人アリ此國永ハ國ノ字ミシカシ後ノハ長シ
長享銘尽(直江本) ⁷⁸	【山城国之鍛冶之次第 ⁷⁹ 】国永(ナガ) 三条ノ弥太郎ト云此作太刀保元之合戦時(カツセンノトキ)村 ⁸⁰ 大所(タイショ)所持(ヂ)相傳(サウデン)同名(ドウミヤウ)二人アリ一人ハ昔物(ムカシモノ)一人今ノワ国長キナリ昔シ物ハ國ノ字ミジカシ

⁷³ 永禄二年本節用集と一緒に綴じられているっぽい？ 用紙は節用集と異なる(節用集には枠あり、こちらはなし)。調べたところ『後鳥羽院御宇鍛冶詰番次第』らしい(ソース：古本節用集の研究 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1871730/1/25> 2025.2.27閲覧)。「後鳥羽院御宇鍛冶詰番次第」及び諸国鍛冶の名、系図等。其の終に「本云延徳二年七月十日右公方様御本申出書寫之」とある」と書いてある。吉原氏の「「銘尽(龍造寺本)」」から見える中世刀剣書の成立とその受容—申状土代の裏に書写された現存最古の刀剣書—」註25によれば「能阿本銘尽(日本節用集)」らしい。「能阿弥本銘尽」でいいかな？見ている資料は同じ(『印度本節用集 古本四種研究並びに総合索引影印篇』)→よくないかも、本間氏の能阿弥本銘尽の翻刻とは内容が違う。さすがに写本の数が多いといえどもこんなに揺れるかな…。ちなみに永禄二年本節用集は永禄二年書写ではない。ややこしい。

⁷⁴ 国書データベース <https://kokusho.nii.ac.jp/biblio/100261361/9?ln=ja>(2025.9.3閲覧)江戸期の写本だそう。版本もあるらしい。永禄二年本節用集と比べて、「ヒサ丸」が見出しとして掲出されているというかな一特徴的な部分が共通するので、関係はありそう。

⁷⁵ 刀剣博物館にて複写を閲覧。「イ」「イ本注」とかも書いてあったので、異本と校合してそう？ 一方で、国永の項目では、人名の誤字、「龍」「竜」の揺れ、「龍膽ヲヤニスカス」(「サ」ヤニスカスなのでは？)、「名付之」の位置(「相模禪門崇廣名付之貞時」ではなく「龍膽ヲヤニスカス故龍膽名付之」なのでは？)など写し間違いではと思うものが目立つ。諷誦の項目では「義家」だけ浮いてるので写し間違いかこの後続くはずの文章を書き忘れたか、など。實次の項目で剣巻に言及していてびっくり、義家為朝…はどこかで一字抜けてそうだけど頼家真朝(実朝か)まで相続されたことになってる。丁寧なんだか雑なんだかよくわからない銘尽だな……。

⁷⁶ 損傷あるが「丸」みある。

⁷⁷ NDL「長享銘尽」(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2539344>)

⁷⁸ 刀剣博物館で複写を閲覧。

⁷⁹ 掲出順が国永→宗近の順で珍しいなと思う。

⁸⁰ 複写だからか？不鮮明で読めない。

往昔抄 ⁸¹	13コマ(茎の押形の図)兼永弟 京 四条弥太郎 国永(くになか) 注進□物 こねかくこ ⁸² こにくありやすり同 かく
元亀元年刀劍目利書 ⁸³	上巻【注進分】国永 京 中巻【注進物】国永 京四条弥太郎 中巻【新作物】国永 京 中巻【山城国系図之外】国永 京四条弥太郎 中巻【諸国同銘近代有之ヲハ大略□ ⁸⁴ 之】国永 京一人 大和国一人 備前一人 下巻【鍛治之秘傳】国永 ⁸⁵ 同御宇時代モ同シ ⁸⁶ 在国力ニ男兼永力 弟也 太刀ノ姿綾小路定利ニ似リ但シ地肌ノ色ハカワリタリ鍛正目 也サシ白目尤地色也然ドモウツクシキ色有リ上手也、庵深シ鎬キ高 シ切崎ツヅマル也乱刃ヲ焼ク也刃色底ハ黒メニテ上白シ美□ ⁸⁷ 物也 此外□ ⁸⁸ 和ニ国永ト打タル作有リ時代後也京国永ハ国ノ字深キ習有 リ秘書口傳有之
吹毛抄 ⁸⁹	【京鍛冶】国永 此作の太刀保元の乱の時村上太郎長守是をはく其 後清野三郎入道相傳同作太刀城太郎持之弘安合戦の時相模禪門 崇圓真時コレヲ尋出メ所持セリリンタウヲサヤニスルユヘニリンタウ ト名付ク又ミサトキトモ云ケリ又鶴丸トモ号ス銘ハ目貫ノ下に打之不 通ニハカハリタリ此国永ノ国ノ字ミシカシ
享禄比写刀劍書 ⁹⁰	【京鍛冶】国永 此たちほうけんのみだれのとき、むらかみの太郎な がもちこれをはく。きよのの三郎入道これをそうでんす。同くだんの たち城の太郎これをもつ。こうあんのかつせんのとき、さがみせんも んそうけいさだときたづねいだししよぢす。りんだうをさやにするゆへ にりんだうとなづく。又みささぎともいうふ也。又う丸ともがうす ⁹¹ 。め いはめぬきよりしたにうつ。つねにかはりたり。国永二人あり。この 国永は国の字みじかし。かのくにながは国の字ながし。
鍛冶銘文集 ⁹²	8コマ【京鍛冶次第前後不同】国永 此作ノ太刀保元ノ乱ノ時村上太 郎長盛帶之清野三郎入道相傳ス同作ノ太刀城陸奥太郎是ヲ以テ弘 安ノ合戦ノ後相模禪門崇□ ⁹³ 貞時尋出之所持リンタウヲサヤニスカス 故ニリンタウト名付又ハミサトキトモ云ナリ又鶴丸トモ云ナリ銘ハ目 貫ヨリ下ニウツ普通ニカワリタリ世ニハ国永二人有コノ国永ハ字ミシ カシ後ノ国永ハ国ノ字ナカシ ⁹⁴

⁸¹ 1955年日本美術刀剣保存協会が出版した影印本がNDLにて閲覧可。

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2483063/1/13>(2025.7.28閲覧)宗近のところに国永の字も見える。最後の方かされているけどたぶん「刃のやう國永に似り」でいいと思う。宗近と国永が似てるの言及、意外と少ないのかもしれません?

⁸² このへん自信ない…

⁸³ 刀剣博物館にて複写を閲覧。

⁸⁴ 解読できず。

⁸⁵ 他の刀工には「下上」とか書いてある刀工もいるけど、国永にはなかった。

⁸⁶ 後朱雀院御宇長暦ノ頃のこと。

⁸⁷ 「敷」か?

⁸⁸ 「大」か?

⁸⁹ 国書データベースにある <https://kokusho.nii.ac.jp/biblio/100002312/7?ln=ja>
8コマ「兼永 五条」の記載あり。

⁹⁰ 本間薫山「古伝書叢文」『刀剣美術』246-249号※享禄比写刀剣書翻刻掲載

⁹¹ ふくみさんは「う丸」は「鶴丸」の誤記か。」としている。

⁹² 国書データベース <https://kokusho.nii.ac.jp/biblio/100098033/8?ln=ja>(2025.7.28閲覧)

⁹³ 「シ+立/王」みたいな字。たぶん誤字。

⁹⁴ 「国」の字、この文に限らず項目全体でどれも全部違う風に見える。

	10コマ【同来系図】国永 四条弥太郎菊丸作者 ⁹⁵
紛寄論 ⁹⁶	(記載なし)
諸国鍛冶寄 ⁹⁷	【諸国鍛冶下上】国永 平安城 ⁹⁸ 。後朱雀院御宇。 【注進物】國永 京。 【新作物】國永 ⁹⁹ 京。 【新御所作】國永 【諸国同銘記之近代除之】國永 京一人 大和一人 備前一人
諸国刀鍛冶系図写(翻刻) ¹⁰⁰	【山城国鍛冶次第不同】三百疋 国永(ナ力) ¹⁰¹
口傳書 ¹⁰²	35コマ【諸国同銘】国永 同一人 ¹⁰³ 備前一人 大和一人
本朝古今銘尽(古活字版) ¹⁰⁴	(記載なし)
解紛記 ¹⁰⁵	(記載なし)
本朝古今銘尽(版本) ¹⁰⁶	12コマ【同御宇 同時代 ¹⁰⁷]下上 国永 在国か二男兼永弟なり 太刀のすかた綾乃小路定利に似たり、但ちいろはかわりたり上手なりいおりふかくしのきたかし切先つゝまやか也乱刃を焼なり刃色そこは黒めにてうへ白し此外やまとに国永どうちたる作あり時代後也平安城国永は國の字にふかき習あり秘書なり
諸国鍛冶系図 ¹⁰⁸	【山城国】國永 兼永弟 國永 子
古今銘尽(慶長16年版) ¹⁰⁹	10コマ【諸国同銘鍛冶次第不同大略書載】国永 くになか 京一人 大和一人 備前一人 11コマ【注進物】国永 くになが 京四条弥太郎 14コマ【新作物】国永 くになが 京

⁹⁵なぜか來に含まれている。系図とは言うが誰とも繋がっていない。ちなみに「国長 号中嶋來」は別で掲出されている。

⁹⁶蓬左文庫にて閲覧可。国永の記載はない...と思いたいが、來国永という怪しい記載あり。要検証。

⁹⁷群書類従に収録されている。NDL <https://dl.ndl.go.jp/pid/936492/1/1>(2025.7.24閲覧) 16コマに兼永いるので参考になるかも?

⁹⁸兼永と離れてるし、別人?

⁹⁹どうして? ? ? ? 「新作者不遠其代。鍛冶銘撰聚。令達上意者也。」とある。

¹⁰⁰藤田達生(2000)「刀剣書の成立:「諸国刀鍛冶系図写」を素材として」『三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学』51巻に翻刻が掲載されている。ネットでダウンロード可。

¹⁰¹参考までに。宗近は万疋、国綱は万疋、吉光は千疋、大和国の国永と備前国の国永も三百疋らしい。国永銘は全部三百疋。

¹⁰²NDL <https://dl.ndl.go.jp/pid/2542743/1/35>

¹⁰³京のこと。

¹⁰⁴NDL <https://dl.ndl.go.jp/pid/9892696/1/1> こっちは慶長12年以前刊の古活字版。

¹⁰⁵東博デジタルライブラリにあったけど、これ写本か...?

<https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/6354;jsessionid=BEC7E4429B4285158AA6BE830BC1171B>

寶壽について書かれてるっぽいが、いかんせん崩し字が読めない。と、他の刀工名出すぎでは?

国書データベースにも写本と版本がある <https://kokusho.nii.ac.jp/work/2165711?ln=ja>

¹⁰⁶国書データベースに版本がある <https://kokusho.nii.ac.jp/biblio/100423152/1?ln=ja> こっちは「右之銘尽竹屋以正本慥相写畢／慶長十六年 五月吉日」の刊記がある。→竹屋系ってことは古今銘尽かも?

¹⁰⁷「後朱雀院 長久比慶長十六ねんまで五百七十四年」のこと。

¹⁰⁸群書類従に収録されている。NDL <https://dl.ndl.go.jp/pid/936492/1/1>(2025.7.24閲覧)

¹⁰⁹「古今銘尽」で検索すると国書データベースに版本がある

<https://kokusho.nii.ac.jp/biblio/100119050/4?ln=ja> 本当に色々な版がありそう...これは慶長16年版(
<https://kokusho.nii.ac.jp/biblio/100442236/1?ln=ja>)

	22コマ【諸国鍛冶下上記】國永 なが ¹¹⁰ 後朱雀院の御宇平安城の住長暦のころより慶長八年まで五百六十六年
如手引抄(慶長十九年古写) ¹¹¹	(記載なし) ¹¹²
如手引之抄 ¹¹³	81コマ 【山城国三條住人一派】國永 同 ¹¹⁴ 二男同銘二代打兼丸リントウ丸ノ作者也鶴丸モ此作也四條ニ住スルナリ
名物扣 ¹¹⁵	鶴丸 國永 二尺五寸九分半 松平陸奥守 三千貫 北條傳來ノ太刀也信長公工傳御當家三枝勘兵衛被下霍丸ト云子細不知
名物帳(提出本) ¹¹⁶	22コマ 鶴丸國永 銘有 長サニ尺五寸九分半 代三千貫 松平陸奥守 北條傳來之太刀也信長公に傳て御家来三枝勘兵衛工下サル鶴丸ト云子細不知
刀劍名物帳(副本) ¹¹⁷	28コマ 松平陸奥守殿 鶴丸國永 銘有 ¹¹⁸ 長サニ尺五寸九分半 代三千貫 北條傳來之太刀也信長公御所持三枝勘兵衛へ被下貞享ノ頃力光的二男出家一乘院伏見藤之森□ ¹¹⁹ 取出す神事等に借シ太刀に致す由也古キ拵モ傳來之書付モ出ル ¹²⁰ 鶴丸ト云子細ハ未詳
詳註刀劍名物帳:附・名物刀劍押形増補 ¹²¹	62コマ 松平陸奥守殿(仙台伊達伯爵家)鶴丸國永 長式尺五寸九分半 代三千貫 北條傳來の太刀なり信長公へ傳る三枝勘兵衛へ下さる貞享の頃か光的二男出家一乘院伏見藤森にて取出す神事並に借太刀に致候由なり古き拵傳來の書付にも出る鶴丸と云仔細不知 北條相模守貞時の太刀なり、もとは餘吾將軍惟茂の太刀秋田城介へ傳り、其後轉々して織田信長公の手に入る、三牧勘兵衛へ賜ふ、本阿彌益忠の證かいにて貞享の頃伊達家にて求められしと云先年伊達家より献上して帝室御物となる、此太刀の由来は伊達家にあり煩はしければ大略を記す。
刀劍名物牒	松平陸奥守殿 鶴丸國永 二字銘 長さニ尺五寸九分半代三千貫

¹¹⁰ 「永」に「なが」と振ってある。

¹¹¹ 刀剣博物館にて閲覧。「如手引」とつくのは2冊あるようで、こっちは慶長十九年古写の「如手引抄」。閲覧資料上限で正徳古写本の「如手引」は見れていない。袋綴じじゃなくて四折りで綴じてあるのと、後ろに何丁か白紙があった。

¹¹² 後述の「如手引之抄」では國永の記載があるが、慶長十九年古写本ではなし。

¹¹³ NDL <https://dl.ndl.go.jp/pid/1871575/1/81>(2025.7.11閲覧) 出版社不明、刊行年不明。序文に成立や参考本の記述らしいものは見当たらない。目次では第十巻に陸奥とあるが公開されておらず不明。公開部分に髭切関連の刀工はみられない。國永の項目がある【山城国三條住人一派】の区分はそもそも慶長古写本にはないので、兼丸が何かわからないんですが、これだけ資料見ていて兼丸が出てくるのが如手引之抄だけなので、たぶん誤写かな。

¹¹⁴ 在国のこと。

¹¹⁵ 酒井元樹「いわゆる『享保名物帳』に関する一考察：島根・和鋼博物館保管『名物扣』影印・翻刻」(東京国立博物館紀要56号)に影印と翻刻が掲載されている。余談すぎるんですが、めちゃページ数があるので遠隔複写頼むときはお値段跳ね上がりますのでご注意ください。鶴丸だけほしいなら、影印は202ページ、翻刻は252ページです。

¹¹⁶ 東京国立博物館デジタルライブラリー <https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/3880>(2025.8.29閲覧)

¹¹⁷ 東京国立博物館デジタルライブラリー <https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/3798>(2025.8.29閲覧)

¹¹⁸ 右側に何か書かれているが解読できず。「アイ□分也」？ 卷末欄外に「朱 □ハ異本工有之由」と書いてあるが、鶴丸國永の項目のこの箇所で朱書きはされていない。

¹¹⁹ 解読できず。「より」ではなさそう？

¹²⁰ 朱書きにて何か書かれているが解読できず。「但鶴丸記此□ノ入有之？」

¹²¹ NDL <https://dl.ndl.go.jp/pid/951684/1/62>(2025.8.29閲覧)大正8年の方。

	<p>一本長さ式尺五寸八分半 北條傳來之太刀也信長公へ傳る三枝勘兵衛へ被下貞享の頃か光的二男出家一乗院伏見藤の森にて取出す神事等に借し太刀に致由也古き拵傳來の書付も出る鶴丸と云子細は不知</p>
大日本刀劍史 ¹²²	<p>284コマ 名物鶴丸国永一名不動(帝室の御物)</p> <p>名物中の名物、鶴丸又不動の別名、最初の所持者は保之の村上永守、城太郎に至って紛失、越後にその城址あり、瀧谷山慈光寺は楠公未子の開基、正行の幼名は庄五郎、鶴丸伝来書、信長の手に入る、御牧勘兵衛拵領、本阿弥宗家の益忠発見、貞享元年の記録、蝶夢散人は何人か、之北条氏の名宝、鬼丸国綱を執れど、国永は五条兼永の子、伊達の名物、伊達の腰物由緒書、名物集中の記事、生忠目釘穴一箇、伊達家より奉納、帝室の御物。</p> <p>鶴丸国永は名物として著名なものであるが、この鶴丸国永には一名不動の異名もあった。</p> <p>由来、名物として知られるものには、それが名誉の逸品傑作であることは言ふまでもない。面もその逸品たり名刀たる中にも、この国永は特に激賞しても差支はない。国永、兼永などは元来その作品を見るにも容易ではないが、国永に至つては殊に然りで、今日現存する物の中一点難を打てぬ傑作として垂涎に値するものは、八代將軍徳川吉宗が伊勢神宮に奉納した国永と、一つはこの鶴丸国永であらう。国永は三条宗近の系統で、宗近の門に有國があり、その子兼永最も著がれ、国永はその兼永の子で、父子共に劣らぬ名工であった。</p> <p>この鶴丸は仙台伊達家の重器として著名であつたが、遡つてその由来を辿ると、元は 桓武帝八世の孫余吾将軍平維茂の佩刀で、今より七百余年前の保元の頃には、維茂の孫村上太郎永守の所持であつたが、村上没して清野三郎入道相伝し、後ち城太郎が之を持ち弘安の合戦に紛失した。</p> <p>城太郎は越後国中蒲原菅名庄に城砦を構へていた。この付近は源平以来の古戦場址で、南の瀧谷山慈光寺は正成の末男桀堂の開基である。この寺には正成の遺書、鎧、巻物、太刀などが秘蔵されていたが、維新以後文化の移入や風俗の頽廃につれて、深山幽谷の崇巖も年と共に薄らぎ、大門八町の老杉も次第に切られ、名物の大銀杏樹も今はその影を止めない。寺宝の鎧、太刀等もその真物は何れかに飛んで、現在の鎧や巻軸後代のものと推せられる、正成の遺書は曲亭馬琴もその著松染情史に引用している程だが、その遺書には、</p> <p>『独之巻布從君拵領、具足從祖我等着候得共、長代之送形見候以上』『此度隼人差越事、非別義我等最期近覚候、貴殿成長之器量見届度候得共、義重候、更雖遁、勤嶽無怠、成長之後我等心中可被令察候、謹言。</p> <p>建武三年正月廿日 兵衛正成 楠庄五郎殿¹²³</p> <p>楠庄五郎は正行の幼名なりとは吉野拾遺にもあるが、思ふに慈光寺の開基桀堂は正成の末男なるを以て正行には弟である。即ち正行の戦士後父と兄との遺物を携へて越後へ落ちたものであらう。</p> <p>又、瀧谷の南二里を隔てて、七谷といふ部落が山と山との諸所々々に散在しているが、ここには新田の一文残党が逃れて、今でもその末裔が残つて居り、更に東して国境の山を越れば、そこは岩代であるが、ここにも平氏末葉の部落があつて、全然別天地の習俗をな</p>

¹²² NDL <https://dl.ndl.go.jp/pid/1256324/1/282>(2025.8.26閲覧)鶴丸由来記はここに掲載されている。髭切、膝丸、鬼切、鬼丸、薄緑、微塵丸もいた

¹²³ 返り点等は省略した。かぎかっここの終わりは項目末尾にある。

し、現代とは遠く離れた太古そのままの生活を営んでいることが最近の新聞にも報ぜられたが如く、兎に角越後から国境の岩代にかけた山間僻地は、今尚ほ兵糧の焼け米や矢ノ根その他の器物が発見される一事に見ても、往年の古戦場址を語つているが、城太郎がこの国永を所持し、弘安の合戦に紛失したとは言ふものの恐らく越後に於ての紛失であらう。が、紛失とは言ふものの幾千もなくして北条貞時が之を尋ね出した。貞時が之を尋ね出したのもこの国永が當時既に著名であつたことが証明される。之には伝来の書付がある。曰く、

伝来の書付『京師之良治国永所作之太刀、一名鶴丸。当初既有名劍奇物佳称矣。

桓武帝八世苗裔、余五將軍平維茂相伝。孫城太朗平貞茂佩之威功甚多矣、中隱而不顯于世。相模守平貞時、恒憂彼太刀不伝憂旁尋終得之於弘安中戰場、再為平氏北條家珍矣。伝至織田氏信長公、三牧勘兵衛有忠勤于信長公、捨命於処々戰場、委身於往々軍役、故以信長公重賞餘賜三牧以鶴丸、三牧無男子、有女伝彼遺劍、而不知其為名宝、故失其伝、女嫁松田氏、而生男、未子為僧、名素懷、老母以彼太刀讓與素懷、懷頃適欲決彼太刀之真偽、之相示本阿彌三郎兵衛尉益忠、益忠居然驗曰、此是正名劍鶴丸也、是劍北條家相伝之宝刀、実一世奇物也、法決為北條家珍何以為徵、若夫不有明証有、不能決為鶴丸究為名劍矣、於是懷憂彼名劍之隱、奮然尋其証有無、終搜古函得古翰三紙、其一明智氏光秀答三枚書也、其文曰云々、看此書則明識伝北條織田家名劍、無猶予依之携此書重示益忠、益忠欣然喜曰、是書果以為鶴丸之明証也、同氏相議、仰有名劍、益忠歎曰、古昔名劍宝刀伝于世甚希也、此太刀雖錄家伝之書、未曾得見、奇哉当今之時此名刀出干世矣、拙竊以夫宝刀隱顯名劍之存没繁運之通塞因國理乱者歟、薛獨有曾言、名劍去無道以就有道矣、良有以也、樂哉己名国永、又号鶴丸為国家永久之嘉兆宝寿千載良瑞、亦不誤矣、於是製証文加印於表裏、實貞享元甲子歳仲夏也。懷請予以記此始終、不能巨拒無憚質勝野明記事実云爾。

貞享元甲子歳夏六月下旬、蝶夢散人不異子誌』

云々とあるが、蝶夢散人が如何なる人なるかは詳らかでない、俳諧に蝶夢があり、又三牧の孫素懷が僧になつてゐるからこの俳諧蝶夢の事かと思ふと時代が異つてゐる。俳諧蝶夢は明和安永頃で、寛政に死んでゐるから無論之ではない。文は巧みでないがこの伝来書きで事実は判明する。本阿彌三郎兵衛益忠は本阿彌の宗家で、光達の子であるが、父光達病身の為め部屋住みとなつて隠居をした所から、益忠本阿彌の宗家を襲いで十二代の光常となつたのがそれであらう。著名な光徳も始めは益忠と称したが之は天文に生れて元和に死んでゐる。この益忠が一見して、之れ名劍鶴丸なりと驚いてゐるのは、如何にその作が目を驚かす傑出の逸品なりしかを知るべく、同時に鶴丸が古來より北条氏の重器として知られていたことも察せられる。北条氏の名器としては別に時頬の鍛へさせた名劍鬼丸国綱もあるが、五条の国永は粟田口の国綱よりも遙かに古く且つ、保元以降北条氏の名器として相伝して來たのだから、その來歴や作品から言へば、鬼丸国綱よりは寧ろこの鶴丸国永が北条氏重代の重器であらねばならぬ。

北条氏が滅んで、之が織田信長の手に入り、信長から三牧勘兵衛に伝はつて孫の素懷が所持していた事は明瞭だが、素懷が如何にしてこの明記を手放したかは不明なもの、幾千もなくして之が伊達政宗の手に歸し、爾來伊達家の重器となつて名物鶴丸は愈々世上に名高かつた。伊達腰物由緒書に曰く、

『鶴丸国永御太刀、銘有、長二尺五寸九分半、元禄十六年八月金

	<p>二百枚(名物帳には百五十枚)獅山様(吉村)御入国為御祝儀、宝永元年六月二十七日従肯山様(綱村)太田將監を以被進之、忠山様(宗村)初而御入国の節獅山様為御祝儀被進之、覚書に保元之頃村上太郎永守蒂之其後清野三郎入道相伝、(保元云々より之まで伝来書になし。)其後城太郎持之、弘安合戦の時失ひ侍しを北条貞時禪門崇圓尋出して所持、其後信長公より三牧(名物帳に牧か枝に作るは誤なり)勘兵衛に賜ふ、其後出家所持云々劍に輪鋒をすかす依利不動と名く、又鶴丸と号す云々』</p> <p>とある、鶴丸の所以は不明であるが、不動の別名は剣に輪鋒とあるから思ふに不動の利剣を鑄つたものであらう。名物集、中巻の第三番に左の記事がある。</p> <p>『松平陸奥守殿 鶴丸国永、長二尺五寸九分半、代三千貫、北条伝來之太刀也、信長公へ伝はり、三牧勘兵衛に被下る、貞享の比か光的二男出家一乗院、伏見藤之森にて取出す、神事等に借太刀に致由也、古き拵え、伝來の墨付も出る、鶴丸と云ふ仔細は不知』</p> <p>云々とあるが、尚ほ詳細に記すると、銘は国永、生忠、目釘穴一個、刃の長サニ尺五寸九分半、刃文丁子乱、折紙並に由緒書の添うた桐箱入りで、之等の諸点から見ると、同じ北条氏の名器でも、有名な鬼丸国綱に勝るとも劣らぬ絶世の逸品で、殊に之が神事等の借太刀になつていた事でも、如何に貴重神聖視された名剣であるかが窺はれる。光的是本阿弥光室の二男であるが、光的の二男が出家して一乗院と称した所から見れば、三牧勘兵衛の孫素懐も僧であつたから、素懐からこの一乗院に伝はり、更に伊達家の宝器とつたものであらう。</p> <p>即ち鶴丸国永は伊達家の名器として知られていたが、明治の初年、伊達家から之を宮内省に奉獻して、今は帝室の御物となつてゐる。また、名物帳記載の伝來書は、何時か伊達家の宝蔵から逸出して見当たらなかつたが、その後故人の竹中公鑑氏が発見して宮内省に献上し、現にこの名器の鶴丸と共に備はつてゐる。』¹²⁴</p>
日本刀百科事典	<p>くになが【国永】京都三条在國の次男とも、三(五)条兼永の子ともいう。弥太郎または孫太郎といい、太秦国永と称したともいう。京の三条、四条または菅原に居住。初めは兄の兼永と同居したという。天喜(一〇五三)ごろ。承保三年(一〇七六)没、六十三歳とする説は信じがたい。作風=小杔目詰まり地沸えのついた地鉄に、沸え豊かな直刃、小乱れ小足入りの刃文をやく。銘の国字は□のなかが「と」の形になったものを珍重する。切れ味もすぐれ"注進物"の部に入る。竜胆丸・陵丸・鶴丸・菊丸などの名作をのこす。</p> <p>つるまる【鶴丸】①『享保名物帳』所載、京の五条国永作の太刀。初め保元(一一五六)の乱のころ、村上太郎長盛所持。長盛は初め近国と称したともいう。『保元物語』に信濃住人・村上判官代基國の名が出ている。その甥に仲盛がいる。長盛とはこの仲盛のことかも知れない。その一族の清野三郎入道所持。清野家は信州埴科群清野村(長野市清野)に住し、村上家の代官を務めていた。両家とも村上源氏であるから、村上源氏の家紋である竜胆の紋を、太刀の鞘に・太刀の金具に、または鈕に、透かしになっていたとも、あるいは鞘が螺鈿になっていたので、竜胆丸と呼ばれていた。その後の伝来については、竜胆丸と鶴丸の同物説と、別物説とがある。後説では、竜胆丸を清野三郎所持としたあと、「同作の太刀」つまり國永作の太刀を、城ノ太郎も所持、とあって、明らかに清野三郎の國永と、城ノ太郎の國永を区別している。その上、この別物説を掲げる古剣書が、年代的に同物説よりずっと古いから、別物説を正しいとすべきであ</p>

¹²⁴ ママ。

る。別物説で最初の所持者を、城ノ太郎また城ノ太郎平貞茂(貞成の誤り)とする説と、城ノ奥州太郎・城ノ陸奥太郎資持(資茂の誤り)・城ノ陸奥太郎近延(親信の誤り)などとする説とがある。城ノ太郎を平貞茂とする説は、他の説に比して年代がずっと若く、貞享(一六四八)ごろの資料だから、採るに足りない。城ノ陸奥太郎説を探るべきであるが、これは安達姓を名乗った陸奥太郎貞泰のことである。城一族で陸奥守になったのは、貞泰の祖父・泰盛が初めてだった。泰盛一族は弘安八年(一二八五)十一月、いわゆる霜月騒動で、北条氏の策略により滅亡した。まだ年少の貞泰もそれに殉じたはずである、北条貞時はこれを弘安の役の戦場で拾ったともいうが、貞泰を敗死させたとき入手したものであろう。これを陵または陵丸とよぶのは、城ノ太郎の墓から掘り出したから、あるいは城ノ太郎、または北条貞時の墓に掛けたからともいう。中国では季札が徐君の墓の木に、わが愛劍をかけて去った、という故事があるが、わが国には墓に刀をかける、という風習はないから、城ノ太郎つまり泰盛一族の墓から発掘した、というのが真相であろう。北条貞時から同家の伝来刀となった。その後の伝来は不明であるが、同じ平氏である織田信長が入手。それを与えたのは、三枝勘兵衛とも、三牧勘兵衛ともいうが、後者が正しい。前者はまだ生まれていなかったからである。三牧勘兵衛は正しくは御牧勘兵衛と書き、名は景則という。信長死後は豊臣秀吉に仕え、千七百石給せられていた。子の勘兵衛信景が関ヶ原の役で敗れ、浪人となつたらしく、名も四手井清庵と改めている。それで鶴丸も手放したのであろう。勘兵衛家は山城久世群三牧村にあったので、そこから程近い伏見の藤森の某家が、鶴丸を譲り受けた。本阿弥光の次男は出家して、一乘院と称した。それが貞享(一六四八)ごろ、藤森の某家から鶴丸を取り出し、藤森神社の神事などに貸し出していた。藤森神社では五月五日、甲冑をつけた武者行列をする。それに貸し出していた。そして、元禄十六年(一七〇三)八月三日、金二百枚の本阿弥家折紙をつけた。その後、本阿弥六郎衛門の添状をそえ、森田左衛門という刀屋が、鶴丸国永という触れ込みで、奥州仙台の伊達家に納めた。同家ではそれに早速、同家の定紋・引両入りの金具をつけ、鞘にも同じ紋蒔絵にした太刀拵えをつけた。貞享(一六八四)ごろの説として、三牧勘兵衛には男子がなかつたので、娘がこの刀を持って、松田家に嫁いだというが、勘兵衛には前述のとおり、信景という嫡子があった。その子孫は、花山院家の公家侍になって、永続しているから、以上の説は創作である。さらに、松田家に嫁いだ娘の生んだ末子が出家し、素懐と称した。それがこの刀をもらったが、そんな名刀とは知らないので、本阿弥光徳に鑑定を求めたところ、これは鶴丸国永だ、といわれて驚いた。光徳から、何か証拠になるものはないか、と言われたので、素懐が帰って調べてみると、果たして明智光秀から勘兵衛あての手紙に、そのことが書いてあった。喜んだ素懐は、貞享元年(一六八四)六月、蝶夢散人にたので、以上の由来を漢文に綴ってもらったという。しかし、本阿弥光徳は元和五年(一六一九)死去で、とっくにあの世に行っていた。明智光秀を引き合いに出しているが、光秀に使えたのは三牧三左衛門といって、中川清秀に斬られた。三牧勘兵衛とはまったく別人である。享保四年(一七一九)、本阿弥家から幕府に提出した『名物帳』に、鶴丸国永の由来も出ているが、貞享元年(一六八四)の『鶴丸由来記』とは異なる。よって、これは創作を見るほかない。鶴丸は伊達家で本阿弥成善に、入念な研ぎをさせたあと、明治三十四年、明治天皇へ献上した。その時、旧姓本阿弥の竹中公鑑が、貞享(一六八四)の『鶴丸由来記』を探し出して、宮内省に提出した。しかし、創作では一顧の価値もない。『享保名物帳』には、「代三千貫」とある。元禄十六年(一七〇三)、金二百枚の

	折紙がすでにについているのに、それ以前の代付けを書いているのはおかしい。鶴丸という語原については、「子細は不知」とあるが、初め村上太郎の佩刀だったころ、柄えに鶴の紋が入っていたため、という説がある。しかし、村上家の国永は竜胆丸であって、鶴丸ではなかったし、また村上家の紋は鶴ではなかった。鎌倉幕府から厳島神社へ奉納した太刀には、鶴丸の紋を入れるのが恒例になっていた。すると、これも北条氏がどこかの神社に奉納するとき、鶴丸の紋をつけたので、鶴丸国永と呼ぶようになったのであろう。北条貞時以後の所伝が不明なのは、どこかの神社に奉納されていたからで、それを織田信長が召し上げたのであろう。刃長二尺五寸九分五厘(約七八・六センチ)、反りは高くて八分八厘(約二・七センチ)。地鉄は小板目つまり、地沸えつく。刃文は小沸え出来の小乱れ、先は直刃に足入り。中心はうぶ、「国永」と二字銘。 ¹²⁵
※参考※能阿弥銘尽 (和鋼本No.6)	【山城国】国永 彼国永ハ保元ノ乱(みたれ)時村上太郎なかもちはヲはく
※参考※弘治銘鑑	【京鍛冶次第前後不同】国永 此作ノ太刀保元ノ乱時村上太郎長盛 帶之又云銘ハ目貫ヨリ下ニ打之普通ニカハリタリ世ニハ国永二人ア リ此国永ハ国ノ字ミジカシ後ノ国永ハ国ノ字ナカシ
※参考※宇都宮銘尽	(参考:【太和国古今】国永 如此[橿円]一目貫穴ヨリ下ニ穴ヲア ルナリ是ハ十市之住人 【古今所々時代不同】国永 四条弥太郎菊丸作者也)
※参考※日本国中鍛冶文集	【京鍛冶】国永 銘ハ目貫穴ノ下ニアリ切崎不通ニカワル国ノ字短シ 此作ノ太刀保元ノ乱ノ時村上ノ太郎長盛帶ス其後清野三郎入道相 傳ス同作ノ太刀城ノ太郎所持ス弘安ノ合戦後相模□門道崇貞時タツ ネイタシテ所持ス臨刀とナツクサヤニスカスユヘナリ又ハミサトキト モ云ホリイタスユヘナリ京国永ト云鍛冶二人アリ国ノ字ニ付テ口伝ア リ國國 【同国他国同銘集】国永 国ノ字短シ此作ノ太刀保元ノ乱ノ時村上ノ 太郎長盛帶ス清野三郎入道相傳ス同作ノ太刀城太郎所持ス弘安ノ 合戦ノ時失畢其後相模禪門崇道貞時タツネ出シテ所持ス臨刀ナ ツクサヤニスカスユヘナリ又ハミサトキトモ云ホリ出スユヘナリ銘ハ 目貫穴ノ下ニアリ切崎不通ニカワル
※参考※秋霜秘書	【山城国】国永 国永二人あり此国永ノ国ノ字ハつまれり国ノ字長ハ 別人也此作保元ノ乱之時村上太郎長盛帶之なり其後清野三郎入道 相伝又此作太刀城陸奥十郎帶之弘安合戦ニ失たるを相模禪門宗 温尋出てりんたうを鞘ニすかすによりてりんたうと名付秘蔵せられたり 中子はつちめ銘は目貫穴より上にシのきみねにそいて面折也
※参考※日本太刀刀銘尽	【京鍛冶】国永 此作の太刀保元の乱の時村上太郎長守是をはく其 後清野三郎入道相傳同作太刀城太郎持之弘安合戦の時相模禪門 崇圓貞時は尋出し所持せりりんたうをさやにすかす故にりんとうと 名付たり又みさトキとも云けり又つる丸とも号銘はめぬきの下に打 之普通にはかわりたり此国永は國の字短し
※参考※日本鍛冶集	【京鍛冶】国永 此作太刀保元の乱の時村上太郎永守是をはく其後

¹²⁵ 茎の押形が挿入されている。

このあとは「②京の三条宗近の作。のち蝶丸と改名した。③源義家の佩刀。奥州石城群住吉村(福島県いわき市住吉)の住吉神社は、『延喜式』所載の古社であったが、源義家の佩刀・鶴丸と旗を、ご神体にして以来、剣宮大明神と呼ぶようになった。」と続く。ちょっと鶴丸国永と関連するかもしれない?

	清野三郎入道相傳同作太刀城太郎持之弘安合戦之時相模禪門崇圓貞時是を尋出して所持せりりんたうをさやにすかすか故にりんたうと名付けり又みさゝきとも云けり亦つる丸とも号す銘は目貫の下に打之普通にはかはりたり此国永は國の字みしかし
※参考※宝劍銘盡三木伝書	【山城国】国永 二代アリ後ノ国永ハ國の字長シ三条鶴丸ト云作者也後鳥羽院後宇
※参考※後鳥羽院御宇鍛治詰番事	【京鍛治事前後不同】国永 四条弥太郎天喜比人國字短シ備前ノハ國字長シ此作太刀保元乱之時村上太郎長盛帶之城太郎達龍膽丸諸陵ヨリ掘出為名之鶴丸等同作銘ハ目貫下打之也普通ニカハリタリ備前同名□後鳥羽院御銘□□□之御秘藏之時十六葉菊也又彼ノ菊在み八葉も在之金ノ入モ在也面のハトキノ下ニ打セ給也六□御作

刀剣書以外の資料

資料名	記載内容
可觀小説 ¹²⁶	五月十日、往昔北條家伝來鶴磨と号し候太刀入御覽候。此太刀は京師の良治国永作也。二尺四寸九分半二字銘なり。初め余五将軍惟茂之帶、其支流城家為重代。其後北条貞時得之。至後代織田信長公得之。信長公三牧勘兵衛が忠功を賞して賜之。三牧氏無嗣子、有女松田氏へ嫁す、其子僧と也て号素懷伝來之。然共鶴磨なる事を不知。貞享元年本阿弥三郎兵衛益忠看之、初て鶴磨なる事を知る、則證文を出す。代三千貫に極む。明智日向守光秀答三牧勘兵衛書簡一通添之。則国永の太刀勘兵衛拝領の事、謝辞の報書なり。当代儒者人見友見其由来を記す。鞘は蒔絵あり、鱗形と瓜との紋なり。金物は皆赤銅也。
葛巻昌興日記 ¹²⁷	今日往古北条家傳來鶴磨之太刀入御披見京師良治国永作也二尺四寸九分半二字銘也此太刀初余吾將軍惟茂帶之其子流城家為重代其後北条貞時獲之其後又至織田信長公信長公賞三牧勘兵衛之忠功賜之三牧無男子有女子嫁松田氏其子号素懷出家傳來之然共不知鶴磨。去貞享元年本阿弥三郎兵衛益忠見之而初知之則出証文之由代三千貫且明智日向守光秀答三牧勘兵衛尉書翰一通添之則国永之太刀拝領之事三牧謝返報也又人見友元等記其來由鞘ハ蒔絵也鱗形と瓜之紋也金物ハ赤銅也右奥村兵部方より入御覽予取次之即刻被返下之也
御宝物之部仙台家御腰物之帳《仙台家御腰	49コマ 鶴丸国永御太刀 ¹²⁹ 元禄十六年八月 金二百枚銘有 長二尺五寸九分半

¹²⁶ 金沢市図書館ホームページ https://www2.lib.kanazawa-ishikawa.jp/reference/kakan/kakan_367.pdf(2025.4.3閲覧)返り点は省略した。

¹²⁷ 『加賀松雲公 下巻』(<https://dl.ndl.go.jp/pid/781991/1/64>)64コマにちょうど抜粋されていた。加賀松雲=前田綱紀。原本は金沢市立玉川図書館近世資料館に『葛巻昌興日記』が所蔵されているっぽい(データベースでヒットしたのと、ふくみさんが現物を見ているっぽい)。データベースには、「別名「葛巻権佐日記」「葛巻昌興筆記」。公務に関する私日記。昌興(多門、権佐、高俊、昌信)は、延宝元年(1673)綱紀の近侍となり新知250石を受け、同5年(1677)150石を増、天和2年(1682)奥小将にうつり、貞享元年(1684)150石を加え、元禄3年(1690)近侍し300石をうけて計850石、元禄6年(1693)綱紀の馬廻頭半田惣兵衛への処置の過酷さを諫めて知行召放、能登へ流され、罪を赦されたが帰らず宝永2年(1705)配所で没す。50才。旧書名「日記」。」と書かれている。(https://jmapps.ne.jp/amhr/det.html?data_id=7801 2025.4.3閲覧)

¹²⁹ 見出しに朱丸、欄外に朱書で『伊達宗基伯之献上今ハ宮中有御物』、墨書で『山城国三条住兼長子治歴之頃』と書かれている。朱書がいつ追加されたかはわからないけど、朱書があるのは鶴丸国行、太鼓鐘貞宗、大俱利伽羅、鶴丸国永だけ。

物元帳;伊達家御宝物御太刀由緒書》 ¹²⁸	<p>獅山様御入国為御祝儀宝永元年六月二十七日從 肯山様太田將監を以被進之 忠山様初而御入国之節從 獅山様為御祝儀被進之覚書 保元之頃村上太郎永守帶之其後清野三郎入道相伝其後城太郎持之弘安合戦の時失ひ侍りしを北条貞時禪門崇圓尋出して所持其後信長公より三牧勘衛¹³⁰に賜之其後出家所持と云々鋏に輪臙ヲ鋤す依利不動と名付又鶴丸と号す 右本阿弥家の書物に之有由本阿弥六郎右工門覚書あり</p>
鶴丸由来記 ¹³¹	<p>京師之良治国永所作之太刀、一名鶴丸。当初既有名劍奇物佳称矣。 桓武帝八世苗裔、余五將軍平維茂相伝。孫城太朗平貞茂佩之威功甚多矣、中隱而不顯于世。相模守平貞時、恒憂彼太刀不伝憂旁尋終得之於弘安中戰場、再為平氏北條家珍矣。伝至織田氏信長公、三牧勘兵衛有忠勤干信長公、捨命於廻々戰場、委身於往々軍役、故以信長公重賞餘賜三牧以鶴丸、三牧無男子、有女伝彼遺劍、而不知其為名宝、故失其伝、女嫁松田氏、而生男、未子為僧、名素懷、老母以彼太刀讓與素懷、懷頃適欲決彼太刀之真偽、之相示本阿弥三郎兵衛尉益忠、益忠居然驗曰、此是正名劍鶴丸也、是劍北條家相伝之宝刀、實一世奇物也、法決為北條家珍何以為徵、若夫不有明証有、不能決為鶴丸究為名劍矣、於是懷憂彼名劍之隱、奮然尋其証有無、終搜古函得古翰三紙、。其一明智氏光秀答三枚書也、其文曰云々、看此書則明識伝北條織田家名劍、無猶予依之携此書重示益忠、益忠欣然喜曰、是書果以為鶴丸之明証也、同氏相議、仰名名劍、益忠歎曰、古昔名劍宝刀伝于世甚希也、此太刀雖錄家伝之書、未曾得見、奇哉当今之時此名刀出于世矣、拙竊以夫宝刀隱顯名劍之存没繁運之通塞因國理乱者歟、薛獨有曾言、名劍去無道以就有道矣、良有以也、樂哉己名国永、又号鶴丸為国家永久之嘉兆宝寿千載良瑞、亦不誤矣、於是製証文加印於表裏、實貞享元甲子歳仲夏也。懷請予以記此始終、不能巨拒無憚質勝野明記事実云爾。 貞享元甲子歳夏六月下旬 蝶夢散人不異子誌</p>
皇室の至宝 ¹³²	<p>山城国国永御太刀(名物鶴丸)一口 太刀 銘国永 平安時代 十二世紀 刃長七八.六cm 反り二.七cm 平安時代の京鍛冶は三条に宗近が一条院の頃(九八六～一〇一〇)活躍し、その門流に良治がいる。国永は『古今銘尽』に宗近の門人在国の次男で兼永の弟であると記され、時代を長暦(一〇三七～)頃としているが、『能阿弥本銘尽』には「彼国永ハ保元ノ乱時 村上太郎長持是ヲハク」とあって、備前鍛冶の作風と比較して十一世紀後半から十二世紀前半の鍛冶とみてよいであろう。国永は一説に兄兼永とともに三条から五条に移住したといい、五条国永の呼称がある。この作は『享保名物帳』に、 松平陸奥守殿(伊達吉村) 鶴丸国永 銘有 長さ弐尺五寸(実際は二尺六寸)九分半 代三千貫 北条伝來之太刀也 信長公へ伝る 三枝勘兵衛へ被下 貞享の頃</p>

¹²⁸ 東京国立博物館デジタルライブラリー <https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/228/49>(2025.9.6閲覧)

¹³⁰ ママ。

¹³¹ 大日本刀剣史に収録されている(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1256324/1/282> 2025.8.26閲覧)。「伝來の書付」以下の部分を抜粋。返点は省略した。

¹³² 毎日新聞至宝委員会事務局編(1991年)『皇室の至宝 4 御物』毎日新聞社

か 光的二男出家 一乗院伏見藤の森にて取出す 神事等に借
(し)太刀に致(す)由也 古き拵伝來の書付も出る 鶴丸と言(う)子
細は不知

とあって、北条家伝來の太刀が信長に伝わり、三枝勘兵衛が賜り、いつの頃よりか藤森神社にあったものを本阿弥光温の弟光的が取り出して、享保頃には仙台伊達家に伝わっていた、というのである。また、「鶴丸国永太刀 正真 長寸 式尺五寸九分半有之 代金子 式百枚 元禄六年末八月三日本阿(花押)」の本阿弥光忠折紙がついている。この作は明治三十四年(一九〇一)十一月、明治天皇が仙台行幸の節に伊達宗基が献上したものである。作風は小板目肌がよく約み冴えた地鉄に焼出しより沸映りが棒状にくつきりと立ち、直刃調の小乱刃がよく沸えて、足・葉など複雑に働き、刃中二重刃風となり金筋入る。現存する国永の作は少なく、太刀が三振、剣が一振知られている。この鶴丸国永の銘字には特色があり、国字のクニガマエの中が×に一となる。腰元より茎にかけて強く反る太刀姿はいかにも古雅であり、茎が雉子股と呼ばれ、刃方を段をつけて細く削いでいるのは、柄に俵鉢と称する飾りを施した太刀拵がつけられていたためであろう。それに鶴の文様があったのではなかろうか。

(小笠原信夫)

〈法量〉刃長七八.六cm 反り二.七cm

〈形状〉鎬造、庵棟、腰元から茎にかけて反り高く、踏張り付く、小鋒。茎は生ぶ、先細くなり栗尻、鑓目勝手下がり、目釘穴一つ。佩表目針孔上棟寄に二字銘。

〈鍛〉小板目肌よくつみ冴えて、地沸つき、地沸映り棒状に焼出より立つ。

〈刃文〉直刃調小乱小丁子刃となり小沸つき、足・葉よく入り刃中複雑に働き、刃中二重風となり、物打はとくに金筋交じる。帽子刃はわずかにのたれて、先はきかけてわずかに小丸に返り、金筋かかる。

6-3.各資料の特徴まとめ

資料色々見すぎてどれがどれだかわからなくなつたザコによる、なんとなく成立年代順まとめ。成立年代、作者、特徴、読んだ所感などなど。あと読んだけど国永・髭切関係の刀工いなかつた気がするメモ。

このまとめは幻想名刀辞典さんの書物ページ¹³³をベースに、『刀剣書事典¹³⁴』とふくみさんのまとめ¹³⁵等も見つつ気になった情報を書いています。書物すべて網羅しているわけではなく、国永とか髭切関係の刀工の情報が載っていそうなもの限定(なので太閤御物刀絵図とか新刃銘尽とかはない)。私が実際に見たものに関しては閲覧場所等記載していますが、閲覧時の情報なので今後変わる可能性があります。ご了承ください。

資料名	年代	内容
泰時評定分、最明寺殿評定分、最勝園寺殿評定分	鎌倉	最明寺殿=北条時頼、最勝園寺殿=北条貞時。それぞれの時代に名のある名工を選んだもの。いずれも原本は存在せず、上古秘談抄に載る。最園演寺殿評定分には「又追加或人々城禪門作云々」の追記あり。最明寺殿評定分に行重が載っている。
注進物	正和2年(1313年)	鎌倉幕府が全国の業物を報告させ、刀工別にまとめたもの。金窪行親 ¹³⁶ 選定とされる。国永がいる。
上古秘談抄	正和3年(1314年)	名越遠江入道崇喜による。評定、注進物、可然物に関する記述は本書が初。原本および正確な写本は現存しないが、元亀元年刀剣目利書に写しが載っている。
龍造寺本銘尽	觀応2年(1351年)以降	現存する日本最古の刀剣書。龍造寺家政もしくは周辺の人物書写か。誤字脱字も散見され、短時間で内容だけを手早く書写している。 吉原氏の論文に影印・翻刻が掲載されている他、佐賀県立図書館データベースでも閲覧可。
喜阿弥銘尽	永徳元年(1381年)の奥書あり	喜阿弥、喜阿弥陀仏(詳細不明)の著。写本に日比谷本、秋霜本がある。秋霜本は原題「日本國中鍛冶銘文集」で、喜阿弥銘尽に円阿本と觀智院本を合本したもの。刀剣美術に翻刻・抜粋が掲載されている(翻刻した本間氏によれば写本を重ねており明治期以降に写されたこと)。
秘談抄	応永年間(1394~1427)	上記の上古秘談抄を元に、宇都宮三河入道がまとめなおしたもの。原本は現存せず、宇都宮銘尽、秘伝抄(1579年)、新刊秘伝抄(1591年)などの系統本がある。
觀智院本銘尽	応永30年(1423年)	名越遠江守篤時の著作かと言われる、正和銘尽(鎌倉末期頃成立か)の写本。 觀智院本銘尽は3系統の刀剣書を組み合わせて綴じられており、吉原氏によれば現在の配列とオリジナルの配列も違うらしい。 NDLで閲覧可。

¹³³ <https://meitou.info/index.php/%E6%9B%B8%E7%89%A9>(2025.6.25閲覧)

¹³⁴ 得能一男(2016年)『刀剣書事典』刀剣春秋

¹³⁵ <https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=8400626#5>(2025.9.2閲覧)

¹³⁶ 北条義時・泰時に仕えた必殺仕事人はぽい感じがするが、行親以外の金窪氏は見られないらしい。

鍛治名字考	享徳元年(1452年)	享徳銘鑑とも。原本としては観智院本に次ぐ古い写本。分類が独自で、内容も様々な本を集めており首尾一貫していないが、他の伝書にはない記事がかなりあり、物語風の記事も多い。 天理図書館善本叢書に収録されている。
能阿弥本銘尽	文明15年(1483年)	能阿弥は足利義教、義勝、義政に仕えた文化人。その能阿弥から田使行豊へ相伝されさらに補記されたものもある。製作年代ではなく国別で刀工を収録する。写本がいくつか伝わり、異本と校合し翻刻したものが刀剣美術に掲載されている。
後鳥羽院御宇鍛治結番次第(能阿本銘尽?)	?	調べたがよくわからない。永禄二年本節用集と一緒に綴じられているのは「後鳥羽院御宇鍛治結番次第」とも「能阿本銘尽」とも言われていて定かではない。版本もありそう。 書陵部の江戸期の写本が国書データベースで閲覧可。
佐々木氏延暦寺本銘尽(文明十六年銘尽)	文明16年(1484年)	文明銘鑑とも(文明銘鑑は数種ある)。佐々木導誉蔵。何度か異本と校合し、祖本より大幅に加筆修正されている。のに鶴丸の「諸陵」といい髭切の「剣巻」といい、どこからその情報を引っ張ってきたんだという感じがする。 刀剣博物館にて閲覧可。
安田本長享銘尽	長享2年(1488年)頃か	原本不明、写本は安田本、直江本が伝わっている。安田本は火事により焼失、それ以前に接写したものを忠実に写したもののが伝わる。 安田本は祖本の何種類かを編集したと思われ、その1つに観智院本銘尽にも収録されている正安本があつたと思われる(転写本鍛治銘集と記述が似る)。 安田本はNDLで閲覧可。
直江本長享銘尽	長享2年(1488年)頃か	原本不明。与板城主直江氏伝来。直江本の原本は鎌倉末期から南北朝にかけての成立か。直江本の方が具体的な作風についての記述が多く、安田本の方が伝承や逸話に重きを置く。 直江本は刀剣博物館にて閲覧可。
往昔抄	永正16年(1519年)、天文16年(1547年)の跋文がある。	長井(斎藤)利安が集めた茎の押形を、子の斎藤利匡がまとめたものが往昔集(1516年)で、840口ほどの刀剣を網羅する。往昔集の原本は失われているが、利匡の友人神戸直滋が写すことを許されたものが往昔抄。押形が正確で、注の情報など室町末期の刀剣を知る上で貴重な資料。 NDLで閲覧可。
永禄銘尽	永禄2年(1559年)	祖本は南北朝期から応永(1336~1427年)成立か。紙数14枚の簡単なもの。武家社会の刀剣知識に大きな役割を果たした三好一族が所持。
元亀本刀剣目利書	元亀元年?(1570年) ※奥書きに疑義あり	奥書に疑義はあるものの、内容が豊富で良質、記述が広範囲で貴重な資料価値をもつ。「上古秘談抄」、「注進物」、「可然物」、後鳥羽院御宇鍛治結番次第、上古七人鍛冶事、平泰時被評定分十一人、西明寺殿被評定分廿二にん、追加西勝園寺殿評定分、城禪門追加分、御物長

		之寸大方記焉などが記される。 刀剣博物館にて閲覧可。
秘伝抄	天正7年(1579年)	秘談抄の系統本。「尾張竹屋」と称される竹屋惣左衛門理安が編集。これを増補したものが新刊秘伝抄。
新刊秘伝抄	天正19年(1591年)	秘伝抄を増訂したもので、竹屋家伝書の集大成。理安が植松隼人佐へ送った写本が元になった系統の写本が複数ある。また、「口伝書」「古今銘尽」「竹翁古刀銘鑑」も竹屋の系統本。これによって世間一般に近代的な刀剣鑑定が行われるようになり、江戸末期まで強い影響を与えた。
吹毛抄	天正19年(1591年)	細川幽斎奥書本で、天正19年正月に幽斎本人が本阿弥光刹の家本を写したものを作り江戸中期に写したもの。写しの方が国書データベースで閲覧可。
享禄比写	?	松平頼平(秋霜)旧蔵本。奥書に「本書者宮崎於菟丸君より譲受珍收スル者也、昭和三年七月 秋霜」とあるらしい。 刀剣美術に翻刻が掲載されている。
鍛冶銘文集	?	正安3年(1301年)の紙背文書がある。成立はもっと後か?再発見は鈴木連胤(1795年生)による。 国書データベースで閲覧可。
諸国鍛冶寄	慶長以前	塙保己一により群書類従に収録。有名刀工のことも書いてある、のだが、国永いなくないかこれ。 NDLで閲覧可。
諸国刀鍛冶系図写	慶長8年(1603年)	写本。原本には押形があったかもしれない。刀工それに「疋」で相場が記入されている。 三重大学教育学部日本史研究室保管で、三重大学研究紀要に翻刻が掲載されている。
口伝書	慶長12年(1607年)以前	竹屋重安が伝授。著者松田道似久元(=本阿弥光悦?)。古活字版。刊記はなく識語がある。刊記のない古活字版では本朝古今銘尽と並んで最古。
本朝古今銘尽	慶長12年(1607年)以前	こちらも著者松田道似久元(=本阿弥光悦?)。古活字版。刊記はなく木屋良茂と松田道似の識語がある。
解紛記	慶長12年(1607年)	黒庵著だが黒庵については不明。慶長期に出版された刀剣書の中で刊記のある最古の本。古活字本もあるが写本もある。 東博のデジタルライブラリーで写本を、国書データベースで写本と刊本を閲覧可。
本朝古今銘尽	慶長12年、16年(1607年、1611年)	「慶長十二年七月吉辰 木屋良茂」木屋本。慶長12年と16年の版がある。類光悦本の私家版。『古今銘尽』と混同しやすいため、奥書と年号の確認必須。
諸国鍛冶系図	慶長18年(1613年)	塙保己一により群書類従に収録。上記の三重大学所蔵本とは別物とした方がいい内容のこと。岩瀬文庫所蔵本は幕末~明治頃の写し。 群書類従収録のものはNDLで閲覧可。

如手引抄	慶長19年(1614年以前)以前	建部流秘書。建部内匠頭光重による。 慶長19年古写本は刀剣博物館にて閲覧可。刊記不明(近代?)のものがNDLで閲覧可。
銘尽秘伝抄	寛永2年(1625年)	初版は寛永2年だが、版を変え題名を改めて6版まである。当時かなり好評だったようで、出版回数の多さでは古今銘尽に並ぶ。 国書データベースで江戸松會板(寛文7年)を閲覧可。 東京国立博物館デジタルライブラリーでも閲覧可。こつちは写本なのと、ネットで閲覧できる範囲では外題によれば上巻のみ(国書データベースには2冊とある)、奥書もないのに年代や作者がわかるのはなぜなんだ。
古今銘尽	万治4年(1661年)	底本に慶長16年の奥書あり。竹屋系の伝書を底本に、文言を訂正している箇所あり。目利書+押形集(複数の筆者がいる?)。好評を博した刀剣書で、江戸期に6回再販されている。『万宝全書』にも採録されており影響が大きい。『古刀銘尽大全』が刊行されるとそちらに刀剣書の主役は移っていった。
享保名物帳	宝永4年(1719年)	徳川吉宗の命により本阿弥家が作成した、精度の高い名物刀剣リスト。ただし成立経緯は不明なのと、原本はなく、江戸時代成立の刊本もない。提出前の草案、提出本、副本(長根改訂・追加本。近代以降刊行されている)に分類できる。写本は厚藤四郎始まりの大一類、平野藤四郎始まりの第二類に分けられる。 提出前の草案は『名物扣』のみで、和鋼博物館蔵(東京国立博物館紀要に影印・翻刻が掲載されている)。提出本は比較的写本が多く、安永8年源長俊跋の『名物帳』が東京国立博物館デジタルライブラリーで閲覧可。副本は安政4年菅原(本阿弥)質直奥書松平頼平識語の『刀剣名物帳』が東京国立博物館デジタルライブラリーで、刊行された本として羽臥隱史『詳註刀剣名物帳』がNDLで閲覧可。
古刀銘尽大全	寛政3年(1791年)	仰木伊織著。古今名物帳の増補・改訂版の性格だが、系図の信憑性は低い。注進物や新作物の必要性を否定して削除し、新たに「古代名物之剣」を設ける。出版直後から刀剣書の主役を取って代わり、150年に渡って再刊されるなど影響の大きい本。 国書データベースで閲覧可。
本朝鍛冶考	寛政8年(1796年)	鎌田魚妙著。江戸期の刀剣書としては最も冊数が多く、内容も刀剣全般にわたっており、広範囲の記述となっている。諸国鍛冶について異説を色々載せており玉石混淆。流布本の中では古今銘尽、古刀銘尽大全に次いで読まれたベストセラー。 NDLで閲覧可。 四条に住んでる国永、別で掲載されていないか?
校正古刀銘鑑	文政13年(1830年)	芍薬亭長根著。「古刀銘尽大全」に「留書」などを参照し修正をえたもの。のちに発禁となる。尾関善兵衛編「掌中古刀銘鑑」(1849年)の中の「古刀鑑定秘事録」がその写し部分とのこと。

古今鍛冶銘早見出	弘化3年(1846年)	いろは順の刀工人名事典。大正年間まで広く利用された。複数の版があり、「校正古今鍛冶銘早見出」は尾関善兵衛撰、嘉永2年刊。 嘉永2年刊本が国書データベースで閲覧可。
----------	-------------	--